

月刊

OAK・TREE

2020年11月
第420号



今年は、若葉書院に、「人間の森文明研究所」の看板を掲げてから、ちょうど20年となる。

この機会に、大きな文明の転換点を迎えている人類社会に、そのフロンティアを切り拓く取り組みとして、今後、いかなる活動を展開すべきかと考えてみた。

読者皆さんのご意見も、お聞かせいただければ、幸いである。

O……思いやりある人・文明

A……足で歩く人・文明

K……考える人・文明

在野の活動を通して感じ考えていること〈20〉 21世紀日本・世界に新たな地平を切り拓く物語・20

「人類のフロンティア」としての「人間の森文明」研究

～ 『人間の森文明維新』の祈りの原点に宿っているもの ～



A HEART OF OAK I 〈P.3〉

おそらく、今のデジタル社会の進展は、現象的には、世界を一つにする動きを加速していこうと思っています。情報は、世界をより自由に大量に流通するようになり、経済活動も、さらに大きく広がっていくことになるだろうと思います。しかし、それだからといって、人の心までも、世界共通の一つのものになっていくとはとても思えません。（中略）

ですから、私たちはこれから、「人々の多様な心をうまく包み込める統治・社会理念だ」、といえるものを生み出していかなければ、世界は益々分断と対立を深めるに違いないと、思われるのです。

この問題解決を目指すのが、「人間の森文明」です。どのような統治理念や社会理念を打ち出せば、個人の人生の喜びとともに、社会の平和と調和を生み出していけるのか、アメリカや中国が覇権を巡って競い合う中で、その限界が見えてきたときに、こんな文明理念があると提示できるように、これからも更に思索を深めていきたいと考えているのです。

A HEART OF OAK II 〈P.5〉

そしてこの点では、周りの人たちにもお願いをしたいのですが、私は、もうできるだけ形式的なことに捉われたお付き合いは少なくしていきたいと思っています。自分自身がいくら「天地自然の理」から発せられてくる「良知」に基づいて、人生を可能な限り純粋化したいと考えていても、そんな配慮によって、現実社会に引き戻されてしまうと、人生が乱されてしまい、結晶化が阻害されてしまうことを恐れているのです。

とりわけ私は、残された人生は、可能な限り、私心を離れ、公に尽くすものでありたいと願っています。ですから、人間関係も、公に尽くし抜く気持ちで響き合う心同士で形成されてくるものでありたいと思っています。私利私欲の次元で利害を共有する人間関係は、可能な限り少なくしていきたいと思っています。

そんな心構えでいますから、周りの方々から、「こんなことをすれば、小野個人の利益となって、それを喜んでくれるに違いない」という思惑でやってくださることは、実は、私自身が、それをどう受け止めて良いやら、当惑してしまうことが多いのです。私の気持ちが、私自身の利害に捉われ心を持ちたくないと思っていますと、その行為を、うまく受け止めきれなくて、相手に対して申し訳なさが先立つことになってしまうのです。

「心の言葉」〈P.37〉

確かにこれまで私たちが経験してきたことを振り返ってみると、心から楽しく幸福を感じたことというのは、「何をしたか」ではなくて、「誰とともにしたか」ということに、より大きな価値を感じてきたことがよくわかる。

つまり私たちは、物事を判断するときに、より客観的だと考えられるものさしを使って判断しがちであるが、実は、そんなことよりも、自分自身が主体的な意味合いで胸に持っているものさしの方が、ずっと大切なものだということに気がつくのである。

私は、この点に、現代社会が持っている基本問題を感じるのである。つまり、私たちは、目に見える客観的に評価できるものばかりを追いかけて、人々は生き、社会が形づくられてくるものだと考えてきたが、実は、そのプロセスで切り捨ててきたものの中にこそ、もっと大事なものが潜んでいたということの意味しているのではないだろうか。

「人工的国家」の統治理念で 世界全体を抱きかかえることは可能か

～ 私が、今なぜ、「人間の森文明」の重要性を語り続けているのか ～

今後の世界では、アメリカと中国の間での「激しい対立・せめぎ合い」と、その両陣営からの「同盟国獲得合戦」が、大きな波乱要因となってくるだろうと思います。その姿は、約75年前に始まった「米ソ冷戦」を彷彿とさせるものであり、厳しい「米中冷戦」時代の到来を予感させられます。

もちろんこのような事態に立ち入った背景には、「アメリカ・ファースト」を強く主張するトランプ・米大統領と、「中華民族の復興」をスローガンとして掲げる習近平・中国国家主席の「覇権主義的な考え方」があるのは間違いありません。しかしそれと同時に、この対立は、指導者の問題というのみならず、アメリカと中国という「二大強国の世界覇権をめぐる戦い」という姿になってきていることから見れば、今後たとえ指導者が変わったとしても、この基本的な対立構図は変化しないと見る方が妥当だと思います。言うならば、これからしばらくの間は、米中のどちらが世界のトップに立つかという戦いが続くと思えるべきであり、世界の政治も、経済も、軍事も、さらには国際的な諸活動においても、様々な場面で駆け引きが行われ、そのたびに、世界各国は、その対立のあおりを受けて、右往左往せざるを得ないこととなってくるだろうと思います。

ただ、ここで考えておきたいと思うのは、アメリカも中国も、その歴史の中で、古い支配体制を脱却するために、それに対抗するやや極端な理念を掲げ、その下で形作られてきた国家であるということです。

アメリカの場合は、元々はイギリスの植民地であった13州が、その母国からの政治的・経済的独立を果たすために建国した国で

した。そこで、その独立宣言を読むと、自由や権利の主張が、強く打ち出されています。そしてそれは、「フランス革命」に一つの象徴的源流を持つものであり、当然のこととして、闘争的性格を帯びているものだともいえるでしょう。

一方、中国の場合は、ソ連から借り物の「共産主義思想」を足場にして形作られた国家ですから、そこには階級闘争の理念が色濃く宿っているように思います。そして、通常は、現実を追認する形で、現実受容的な政治が行われていても、共産党統治に不都合な状況が生まれてくると、たちまち先祖帰りして、その理念が異常に巨大なスローガンとなって、権力闘争に使われる傾向を持っているようです。

つまり、アメリカにしろ、中国にしろ、その基本は外から借りてきた統治理念に基づいて、人為的に形成されてきた国家であり、通常は、その理念だけではとても国家統治ができないことを十分に知っているにもかかわらず、こころ一番ということになると、その「借り物理念」が大手を振って歩くような国なのだと思うのです。

言い換えれば、その「借り物理念」を礎に作られた「人工的国家」とも呼ぶべき国々なのではないでしょうか。そして、その中心には、闘争に勝利を収めることによってこそ、その理念の正当性を証明することができるという、確固たる信念が宿っているように思います。

ですから、これらの国々は、自らの統治の正当性を証明しようとするならば、他に対して、自らの理念の優位性を常に証明し続けなければ、その足場が崩れてしまうという危機感を持っているのでしょうか。先に述べた通

り、戦いに勝ち残ることこそが、その証となるものだと考えているに違いありません。

そうすると、この米中の対立というのは、自国統治の正当性を国民に向けて明らかにするためにも、他国に敗れるわけにはいかないものなのだろうと思います。

つまり、今回の米中対立は、ただ単に世界トップの覇権を獲得するためというだけでなく、自国民に向けて、その統治の正当性を証明するためにも、絶対に相手に負けることができないというギリギリのものと考えべきなのではないでしょうか。そう考えるならば、自国民に対しても、また世界の他の国々に対しても、この勝敗が明らかにされるころまで、戦いを続けざるを得ないのではないかという気がするのです。

そして、そこで気がかりなのは、アメリカが掲げる「自由主義」にしろ、中国が掲げる「共産主義」にしろ、これらはあくまでもある時点・環境において、ある思想家(グループ)によって、「人工的」に生み出され、それを純化した理念に過ぎないということです。決して、長い時間をかけて、経験的に醸成されてきたものではありません。ですから、数多くの人々によって自然の内に形作られてきた、深い知恵ではないと思うのです。

ですから、ある特定の環境の下では目を見張るような成果を上げ得たとしても、その環境が変われば、あっという間にその神通力を失ってしまうような頼りなさも抱えているのではないのでしょうか。そして、その揺らぎが、現代社会を大きく揺り動かし始めているのです。さしずめ、今は、近代の長い間にわたって中心的価値と考えられてきた欧米的な「自由」・「個人の権利」重視の考え方に対して、中国が、「社会的安定」と「国家の権利」重視の考え方で、その価値変更のチャレンジをしているとも考えることができるのではないのでしょうか。

しかしそれにしても、その人工的に形成

されてきた理念が、人類社会全体に対して、普遍的なものになり得るとは思いません。このようなものは、さらなる大きな環境変化の中で、やがては破綻せざるを得なくなるものだと思われてならないのです。そして、その程度のものでは、これまで長い時間をかけて、世界のそれぞれの土地・民族によって培われてきたものをすべて包含するなどということは、とてもできないことではないかとも思うのです。

おそらく、今のデジタル社会の進展は、現象的には、世界を一つにする動きを加速していきたく思います。情報は、世界をより自由に大量に流通するようになり、経済活動も、さらに大きく広がっていくことになるだろうと思います。しかし、それだからといって、人の心までも、世界共通の一つのものになっていくとはとても思えません。

それが、最近の現象として顕著に現れているのが、アメリカにおける人種差別反対運動の大きなうねりであり、中国における香港やウイグルなどの問題なのだろうと思います。いかに人為的に合理的と考えられるシステムを築き上げたとしても、それが人々の心までも抱きかかえ得ないことを示しているのではないのでしょうか。

ですから、私たちはこれから、「人々の多元的な心をうまく包み込める統治・社会理念だ」、といえるものを生み出していかなければ、世界は益々分断と対立を深めるに違いないと、思われるのです。

この問題解決を目指すのが、「人間の森文明」です。どのような統治理念や社会理念を打ち出せば、個人の人生の喜びとともに、社会の平和と調和を生み出しているのか、アメリカや中国が覇権を巡って競い合う中で、その限界が見えてきたときに、こんな文明理念があると提示できるように、これからも更に思索を深めていきたいと考えているのです。(9月26日 執筆)

「結晶化を目指す人生」の考察 III

～ 論語『子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし(子罕第九の4)』に思うこと ～

孔子の言行録である『論語』の「子罕第九の4」に、こんな言葉があります。

「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし。」

孔子が、「四つの執着」を断ち切って生きようとしていたことを表現した言葉です。その執着とは、次の四つです。

- ①「意」…私心
- ②「必」…無理押し
- ③「固」…頑固
- ④「我」…我執

これら四つの言葉は、すべて自分に捉われてしまった姿を表現しています。そして、これらから離れることによって、人は、「素直」な気持ちになって、「天地自然の理」と響き合って生きることができるようになると語っているように思います。

それは、自分自身が、自らの利害や体面、思い込みや頑固さから解き放たれて生きていくことを意味していますから、とても自由であり、自在であり、外のことにも内のことにも捉われない伸びやかな生き方を生み出して来るものなのではないでしょうか。

そして私は、そのような心境になり得てこそ、「自らの人生の結晶」を生み出すことができるのではないかと考えるのです。

まず第一番目の「意」とはいかなるものであるかといえば、「自分の捉われた思いや考え」ということでしょう。人間は生きていく上で、「自らの意志」は必要でしょう。しかしそれはあくまでも、「天地自然の理」と響き合う意志であるべきではないでしょうか。自分自身が強いフィルターを持っていて、それ

を通して受け取る限られた情報を基に、偏った考え方を形成するならば、それは周りとの摩擦を生み、また対立も生み出すに違いありません。そのような「捉われ心」を持たない生き方をしなくてはならない、ということをお教え諭しているものだろうと思います。

次に、「必」とは何かといえば、「必ずこれは何が何でも曲げない」と考える窮屈な思いを意味しているものではないでしょうか。その思いを人に向けるならば、その相手を窮屈にしまいます。またそれだけではなく、自分自身も、その思いに雁字搦めになってしまい、その感覚や思考を不自由なものとしてしまうのではないのでしょうか。もっと自由自在に、伸びやかに思い考えるという部分があってこそ、人はよりよく生きていけるのだろうと思います。

第三に、「固」とは何かといえば、流動性を全く失ってしまった姿です。固まってしまい、全く自由度を持たなくなった姿です。自分自身で何かを感じ取り、また思い考えながら、何かを生み出していこうとする姿勢がなく、凝り固まってしまっているわけです。これでは、変化に対して、自在に対応できようはずがありません。そして、その中で、人は段々と窒息していくことになっていくのではないのでしょうか。

最後には、「我」とは何かということです。これは端的に言えば、「自分が、自分が」という自己顕示的な姿勢といっても良いでしょう。世の中には、何が何でも強く自己主張をして、自分を人々や社会に認めさせたいと考える人がいるものです。しかしそのよう

な人は、特定の人との利害の中に掬めとられて、小さな道具とされてしまうのではないのでしょうか。そんな人は、目の前では利益があるように見えても、広く人々の心に響く生き方は、とてもできないと思います。

孔子は、以上の四つの掬われた生き方や考え方を否定して、掬われの少ない生き方に身を置くと同時に、周りとの関係も、より自在なものとしていったのではないかと思います。そしてそうであればこそ、その人生を「純粹化した結晶」とすることができ、その妙なる輝きが、人々の心を動かし、その教えが、時を越えて広く人々にも伝わっていったのではないかと思います。

言うならば、孔子の晩年の人生は、自らの教えを説き、それを国の統治に活かすという意味では、それが果たされることなく、不遇の人生であったように見えますが、本人自身は、自らが美しい結晶となり、それが大きく育ち広がっていく姿に、より大きな幸福感を抱いた人生だったのではないかと思います。

私も、若い頃には、職業柄、多くの制約の中で窮屈に生きてきました。その職責を果たす上では、むしろ「意・必・固・我」を重んじる生き方をせざるを得ないところがありました。正直なところ、それは自分の心の声に反するものであることも多かったのです。

しかし、今は、もうそんな仕事を離れてもいますし、様々な制約からできるだけ自由でありたいと願いつつ振る舞ってもきましたから、そのような社会的な縛りは、時間と共に、少なくなってきました。ですからこれからは、自分自身の内部の掬われ心をできる限り少なくしていくことに、努めね

ばならないと思っています。

そしてこの点では、周りの人たちにもお願いをしたいのですが、私は、もうできるだけ形式的なことに掬われたお付き合いは少なくしていきたいと思っています。自分自身がいくら「天地自然の理」から発せられてくる「良知」に基づいて、人生を可能な限り純粹化したいと考えていても、そんな配慮によって、現実社会に引き戻されてしまうと、人生が乱されてしまい、結晶化が阻害されてしまうことを恐れているのです。

とりわけ私は、残された人生は、可能な限り、私心を離れ、公に尽くすものでありたいと願っています。ですから、人間関係も、公に尽くし抜く気持ちで響き合う心同士で形成されてくるものでありたいと思っています。私利私欲の次元で利害を共有する人間関係は、可能な限り少なくしていきたいと思っています。

そんな心構えでいますから、周りの方々から、「こんなことをすれば、小野個人の利益となって、それを喜んでくれるに違いない」という思惑でやったださることは、実は、私自身が、それをどう受け止めて良いやら、当惑してしまうことが多いのです。私の気持ちが、私自身の利害に掬われ心を持ちたくないと思っていますと、その行為を、うまく受け止めきれなくて、相手に対して申し訳なさが先立つことになってしまうのです。

皆さんとは、是非、公に対する取り組みの中で響き合う心を育てていきたいと思っています。そんな心境をご理解いただきたいと思っています。（9月25日 執筆）

「人類のフロンティア」としての「人間の森文明」研究 ～ 『人間の森文明維新』の祈りの原点に宿っているもの ～



【若葉書院を取り囲む「森」の中に、人類社会の未来図を見る】

自分の外から与えられるものによって生きることが当然のことだと考える人間は、自分自身を強くする必要性をあまり感じなくなってしまうのではないのでしょうか。自分自身の内部の力を強化する意識を弱めてしまっている気がしてならないのです

「夢」や「志」というものもそうでしょう。周りに頼り切るわけにはいかない、自分自身がしっかりと生きていこうと考えなければ、とても生きていくことができないという環境であるならば、生きていくために、自分自身の内側にしっかりとした考えを育まなければならないはずなのです。その考えを鍛え抜かなければ、自分が倒れてしまうからです。

しかしどうでしょう。外部に様々な支えが準備されているならば、それにすがってさえいれば体は倒れずにすみます。自分自身の背骨(体幹部)をあえて鍛えなくても大丈夫だということになるのではないのでしょうか。そして、人生の背骨として、最も大切なものは、その人の「夢」や「志」なのではないのでしょうか。

私は、これが現代人の姿だと思えてならないのです。そして、社会も、自分自身が強く生きなくても、周りがちゃんと支えてくれる環境であるから大丈夫、と自らを鍛えることを忘れてしまった社会になっているのではないのでしょうか。

さらに言うならば、あまりにも自分自身が強い背骨を持ってしまうと、周りの環境とぶつかり合うことが多くなってしまうから、そんなものは持たない方がいいのだという価値観さえ生まれ始めているような気もするのです。周辺環境にうまく適応しながら小器用にやっていきさえすれば、それで十分生きていける、ならば、自分の強い思いなどというのはかえって邪魔になるものである、と自らの信念を自棄する生き方まで生まれている気がしてなりません。

そんな風潮の中では、「夢」や「志」などと言っても、それはあくまで表面を飾るファッションでしかないのではないのでしょうか。だから、世の中では、確かに、「夢」や「志」といった言葉が多く使われていますが、それがかえって、言葉だけが空中を浮遊するような軽薄さや頼りなさを生み出しているのではないかとさえ思われてなりません。

小野晋也著『幸せについて考えよう(平成31年2月10日、日本武道館)』 pp.36～37

● 「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」から半年 ●

日本において、「新型コロナウイルス感染症に対する緊急事態」が宣言されたのが、今年の4月7日のことであった。この一文を書いているのが10月7日であるから、最初の宣言発出から今日でちょうど半年ということになる。この最初の宣言時は、特に感染状況が深刻な都道府県に対する措置であったが、それがその後、4月16日には、対象地域が全国に拡大され、国民生活や経済に、大きな影響を及ぼすことになった。

その後、この緊急事態宣言は、幾度かの延長を経た後、5月14日には、特定地域を除く39県で、さらに5月25日には、全国で解除されることとなった。しかし、その後も、大きな集会やイベント、飲食を伴う会合などには、人数制限などの規制が加えられ、国民生活が制約される事態が続いた。

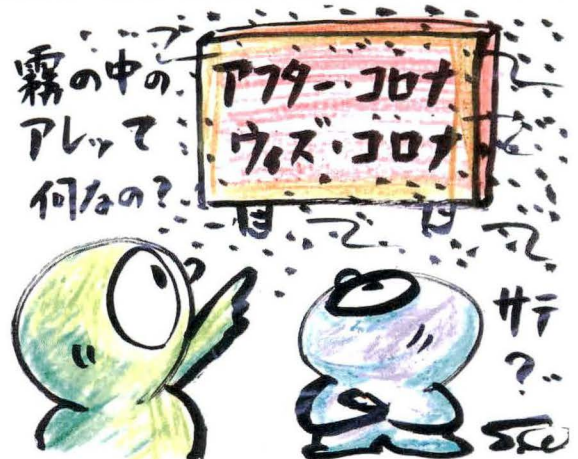
今、これらの制限がだんだんと解除されてきて、大規模イベントなどの集客条件がかなり緩められたり、またこの10月1日からは、2週間の経過観察の義務が付与されたものとは言いつつも、全世界からの日本来訪制限が緩和されたりもしてきている。さらに、この感染症に対する治療薬やワクチンなどの開発・承認なども、徐々に進められていて、ようやく、先に少し明るい展望も見えてくるようになってきた。

果たして、いつになれば、この感染症が最終的終息の日を迎えることになるのかは、今の段階では、必ずしも明らかではないが、少しは、人々の心に希望の灯火が宿されるようになってきているのではあるまいか。

しかし、私は、様々な論者も語っているように、今回の新型コロナウイルス感染拡大の問題は、人類の文明史上における大きな転換点になるものかもしれないという気がしている。それは、この新型コロナウイルスが、私たちの社会の基盤を大きく揺り動かしているからである。感染予防の名目のもとに、人間同士の触れ合いを否定し、これまでの私たちの生活スタイルを次々に突き崩してきている。そのみならず、文明の視点からも、今の時点が、近代人類文明の峠を越えた段階であり、その要請としても、その転換が求められつつある時点に立っているからでもある。つまり、「文明そのものがそろそろ変わらねばならない」という内的動機を孕んでいたところに、この新型コロナウイルスが世界全体に広範な攻撃を仕掛けてきたことから、人々の変革意識が急速に高まってきているということもできるのではないかと思うのである。

したがって、おそらくは、新型コロナウイルス感染が今後収束する事態となった後も、もう人類社会は元の姿には戻らないと思う。この人類社会全体を巻き込んだ嵐が過ぎ去ったとしても、この中で見出された(というよりも、これからそれが見出されて、全人類で共有されるであろう)目標に向けて、新たな歩みを始めていくということになるのではないだろうか。

私の見るところ、現段階では、まだその目指すべきものが明確には描き出されていないようである。「アフター・コロナ」だとか、「ウィズ・コロナ」だとかいった言葉は、大看板に描かれて、多くの論者がその言葉を語ってはいるが、これら



の話は、「今私たちの周りに漂っている深い霧の先には、新しい何かが待っているに違いない」、といった程度の主張であり、人類社会全体の具体的な合意を生み出すだけの説明力と説得力を伴ったものとは成り得ていない、というのが私の見解である。

● 「社会・文明」をの最も簡略な表現とは何か ●

そこで、私が今の段階で胸に抱いているこれからの社会像・文明像について、ここで少し論じておきたいと思う。

私は、社会・文明というものを、最も単純化して表現すれば、それは、一人ひとりの個人が胸に抱く意識と、そこから生まれる行動を、数多く束ねた集積体であると考えている。そしてその意識と行動とは、周りの個人や社会などと結びつき合って、その集積体全体の空気を醸し出していく。それが、その社会・文明の特質を生み出すのだと考えるのである。そこで、まず個々人が変化することを通して、全体社会・文明の変質を生み出し、それは逆に、その全体社会・文明の変質を通して、個々人の意識と行動を変化させていく、という相互の作用を生み出していると思うのである。



今回の新型コロナウイルスの問題では、「三密(密接・密閉・密集)」を避けることが感染対策として最も有効であるとされたことから、個々人と他の人との直接の接触が強く否定された。それでも、個々人の生存のために是非とも必要だという接触は、十分な感染予防対策をとった上で、または通信回線を通してのやりとりという形で、その継続がなされたが、そこまでの必要性がないと

考えられた惰性的・慣習的な営みは、それが完全に否定され、衰退していった。

つまり、この感染予防を名目として、実質的意味の薄い、形式的で慣習的な取り組みについては、ゼロ・ベースでのリセット作業が行われたのである。そしてその見直し作業を行ってみると、これまでいかに無駄なことのために多くの時間とエネルギーが浪費され、またはお金などの資源を割いてきたか、ということに、多くの人が気がつきつつあるようである。とりわけ、非効率なこと不合理なことを多く残しては、経営の土台が揺らいで倒産という憂き目にも遭いかねないと危機感を強めた経営者たちは、これまではなかなか実施することが困難であった大規模なリストラ(事業再編)に取り組み始めている。

例えば、この事態の中でやむなく始めたテレワークの潜在的な可能性を認識し始めた経営者たちは、都市部における高家賃のオフィスの必要性に疑問を抱き、それを撤退する動きを強めている。そしてサラリーマンたちも、その流れの中で、必ずしも大都市部での慌しく窮屈な生活よりも、田園地帯での心豊かな生活の方が、より人間的な生活なのではないかと考えて、地方移住の動きを始めているという。

つまり、今回の問題を通して、社会全体としての常識も変われば、その中で生きている一人ひとりの常識も、確実に変化し始めているということであろう。

いま、このコロナ騒動の中で、これまで常識とされてきたものを一気に押し流すような激しい潮流が、人類社会に襲い掛かってきているということである。そしておそらくこれは、先にも述べたとおり、嵐が通り過ぎた後に、それを元に戻す復旧がなされれば、それで万事解決といった種類の問題ではないように思う。むしろ、今回のこの事態は、これまでの文明社会のあり方に大きな転換が求められているところに、奇しくも生じた問題であり、これを好機と捉えて、大胆に新しい取り組みを始めるべき時であるとも言えるのではないだろうか。つまり、私たちは、台風一過の雲一つない晴天のもとに、新しい社会・文明を構想し、実現していかねばならないと思うのである。

言うならば、今回の新型コロナウイルスは、これまでの旧弊を徹底的に打ち壊し、新しいものを生み出し育む土壌を、私たちに提供してくれていると考えるべきであろう。雑草が繁茂し、害虫が発生していた農地を、すべて焼き尽くして、そこに新たな種子を植えることができる環境を生み出してくれていると考えるべきであろう。もっとも、この感染症によって、身近な人を亡くしたり、その後遺症で苦しんでいたりと、自らの事業が成り立たなくなったりして苦難の道を歩んでいるという方々には、この言葉はすんなりとは耳に入らないだろうと思う。そんな方々には、心からお見舞いを申し上げたいと思うが、それでも、それを乗り越えていかねばならないのである。

それからもう一点、ここで指摘しておきたいと思うのは、この緊急事態の中で、通信回線を介しての人と人との結びつきによって、情報が交換され、仕事が進められるという形態がある程度定着してきているわけであるが、これから先の社会が、このスタイルだけでうまく運営されていくということにはおそくなるまい、ということである。「人間は、知徳体の三位一体で成る」とよくいわれるが、通信回線を通してなされる結びつきは、大きく「知」に偏したものであり、それだけが肥大化して、人間としてのバランスが崩れていくということには、おそらく人間は耐えられないだろうと思う。その人間としてのバランス感覚を回復させるためには、人々は、「頭」の部分だけでなく、「情」や「肉体」における交流と響き合い、そこから生まれる新しい可能性と成長を強く求め始めるに違いないと思うのである。

つまり、「知的情報」だけが高度に、そして効率的にやりとりされる社会ではなく、もっと自分の心が豊かに満たされる、そして生物としての肉体も快く感じる、そんな部分をきちんと備えた、新しい個々人の生き方や考え方が生み出されてくるだろう。そして同時に、社会の側にも、そんな個々人の「知徳体」総体としての幸福感を支える姿が生まれてくるのではないだろうか。そしてそれらの総体として、人々が望む「文明像」が形成されてくることになるに違いないと考えるのである。

それは、先に述べたと同様、これまでの常識や慣習に基づいた旧来の社会・文明に戻るというのではなく、これからより人々の真の欲求に基づいた様々な種子が、すっかり更地となった焼け跡に、次々と植え付けられていくということなのだろう



と、私は考えているのである。

そんな観点から、私はこれからの時代を展望し、自分自身の日本社会と人類社会のビジョンを描き出していきたいと考えているのである。

● 27年前の「OAK・TREE誌」に書いた文章に思う ●

そんなことを思い考えながら、OAK・TREE誌のバックナンバーに目を通していたときに、懐かしい文章に出会った。私がかつて、衆議院議員に初挑戦して落選した後に、3年半にも及ぶ浪人生活を送ったのであったが、その浪人時代最後の号(第99号、1993年6月発行)を読んでいて、そこに、私が目指す政治の原点を再発見したのであった。この直後(1993年7月18日)に総選挙が行われ、そこで私は、衆議院議員初当選を果たしたのである。だから、ある意味で、この文章は、「国政舞台に立つ私の初志」であったとも言えるものかもしれない。こんな文章であった。

「この頃、色々な人とお話をしている中で、こんな質問を受けることが多くなってきました。“あなたは、政治家になって、最終的には何をしたいと思っていますのか?”…その質問に出会うと、私も時に、逆質問を行ってみるのです。“そう問われ



るあなたは、一体私達政治家に何を期待しているのですか?”と。すると、そのほとんどの方は、とまどった表情をして、分からないなといった仕草をされます。そして、こう言われるのです。“私達は、これからの社会をどうすれば良いかがよく分からないからこそ、それらのことも含めて、あなたたち政治家に大きな期待をしてるんだよ”と。

要するに、有権者の皆さんも、この社会の不透明さや不確実さを前にして、今、政治家に何を期待して良いかすらも分からなくなってきているのでしょうか。そして、理想とする政治家像というものも、全く捉えどころの無いものになってしまっているのでしょうか。ですから、有権者の側から政治家を評価するモノサシも失われてしまい、この暫く、政治家への漠然とした不満ばかりが募ってくるけれども、その出口が全く見つからないということになってしまっているのだらうと思います。このようなあいまいな状況では、国民の政治不信に対して、的確な解決の道が見つかるはずありません。

ですから、現状に対して変革を唱える新勢力が誕生しますと、有権者は、たとえその実像が見えず、とてもあいまいなものであったとしても、とりあえず何かが変わると言うのなら、一度はそれに期待してみようという心理になってしまうのでしょうか。考えてみれば、全く頼りない話です。

私は、この様な実状から考えて、これからの政治家は、調整者であるよりも、開拓者でなくてはならないと感じ始めています。しかも、目先の問題に開拓者として挑戦してゆくというのみならず、まだ見えない大きな時代潮流と文明に向かった開拓者といった気持ちが必要だと思うのです。従いまして、冒頭に取り上げたような質問に出会うと、私は迷わず、“行き詰まりつつあるこの世界に対して、その行き詰まりを打開する新文明を築き上げる仕事をしたいのだ”と答えています。つまり、世界の構

造を基本から作り変える仕事を通して、この国の中にも、地方にも、閉塞感を打ち破って新しい成長力を生み出す仕事をしてみたいと考えているのです」と。

正直なところ、この文章を読み返して、私は改めて、自分の在野への転身に間違いはなかったと確信を覚えた。「そうだったのだ。私の政治の原点というのは、この日本の目前の問題を小器用に片付ける政治ではなく、あくまでも行き詰まりを深めている現代社会に、文明的視点において、新しい道を切り拓くことにこそあったのだ」と。そしてその姿勢を貫く政治をしようと、国会議員としての5期16年間、出来る限りの努力を続けてきたつもりではあったけれども、結局それは、永田町を取り巻く人たちから認められず、また自分自身もその中で苦痛を覚えることが多くなり、さらには国民全体も、政治家そのものに大きな不満を募らせたのであった。そして結局は、このような事態にまで立ち至った以上、野に下るしかない、と「**在野の政治家**」の道を選択したのであった。そんな思いが、改めて心の中に蘇ってきたのである。

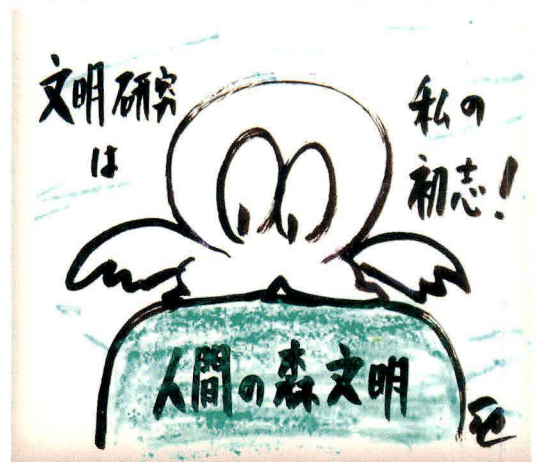
だから、当然、人によって色々な見方はあるに違いないと思うのではあるが、私自身は、むしろ「**初志を貫徹しよう**」として、言い換えれば、「この社会にとってより重要で私にしかできないだろうと思われる仕事をしよう」として、議員バッジを自ら外したわけであり、またそのことを衆議院議員に初めて当選する前から、既に広く多くの方々に宣言していたわけであるから、この決断は、決して多くの支持者の皆さんの気持ちを裏切るものでもなかったのだと、改めて感じたのである。

こんな思いを胸に抱くと、改めて勇気が湧き起こってきた。そして、これから先の困難に立ち向かう気力も、沸々と生まれてきたのである。

私の使命は、あくまでも「現代の閉塞感を高めつつある社会・文明に対して、人類社会の新しい可能性を提示することにある」のだ。そしてその取り組みを深め、人類社会に有為な展望を切り拓くために、「十分な時間と自由が保障されている、在野での活動を展開することこそが、私の本当に求められている仕事に違いない」のだと。

だから、その確信のもとに、これからは何者も恐れず、ただ自分の良知に従って、歩み続けていきたいものだと思う。ここには、もう周りの人々や世間からの評価や名声もいらぬ。ただこれまでに様々な経験を通して培ってきた知恵や意志に従い、持てる力を尽くして、その目標に立ち向かっていくだけである。そして、その挑戦を通して、日本や人類社会に対して、新しい可能性を提示すべく研究を進めていきたい、そんな思いになっているのである。

そう思いつつも、この先に無限の時間があるわけではない。コロナ後の世界を展望する仕事という意味ならば、このしばらくの期間が重要な時間となるだろう。だから、これからは、これまでに増して、精力的に、「人間の森文明」の研究とその一定の取りまとめを急ぎたいと考えている。そして可能なことならば、それを何らかの形で発表もしていきたいと思っているものである。これこそが、私の夢であり、志なのである。 ■



■■ 「人間の森文明研究所」が目指しているもの ■■

「人間の森文明研究所」が目指すのは、「人間の本性に根ざした文明の姿を描き出す」ことである。つまり、私は、人類はこれまで、「人為的に作り上げられた、表面を美しく飾った、かりそめの理想的文明像」に幻惑されて、ここまで歩んできたのではないかと考えているものである。しかし、このしばらく、その理想とされたものが、人間が生来持っている本性と異なるものを追い求めてきたがために、時とともに、その乖離が広がる流れとなってきたのではないか。そして、その中で、人間の方がだんだんと押し潰されてきつつあるのではないか、という危惧を抱かざるを得なくなっているのである。

その中で、人々は、年とともに息苦しさを感じて、それを紛らわそうとしてか、目先の快樂ばかりを追い求め、あたかも酒や麻薬に手を出して憂さ晴らしをするかのように、ますます目の前で体感できる「表面的な快感」に溺れて生きようとしているのではないだろうか。私はかねてから、この文明が持つ基本問題として、次の三点を指摘してきた。

- ①心(本質)よりも、形式的なことを重視する「形式主義」。
- ②小さな努力で大きな成果を求める「効率主義・便宜主義」。
- ③「自分さえよければ、今さえよければ」と考える「小市民主義」。

これらの問題は、短期的・現象的には、一定の顕著な成果を生み出すものだったのかもしれないと思う。しかし、この生き方の根本問題は、この流儀で生きていくなれば、人間が成長する機会を、自らが切り捨ててしまうという点にあるのではなかろうか。そしてそれは、人間の本性に反しているものだと、私には思われてならないのである。

自然界にあるものは、すべてが生成発展するものである。つまり、何らかの成長を常に続けていくということが、私達人間にも、生来備わっている本性であり、現実がそれに反するものであるがゆえに、人々は、時とともにそこに苦痛を感じ始めているのではないだろうか。つまり今の私たちが胸に抱いている成功観念や成長実感というものは、その本性に反するものであるがゆえに、「長期にわたって維持される真の幸福感」に結びついていないのではないかと思われてならないのである。

また、私は、地球全体を一つの大きな市場と考え、企業がその生き残りをかけて激しく競い合っている経済競争も、異常なものではないかと考えている。確かに自然界にも、激しい生存競争があつて、強い者が弱い者を打ち負かす「弱肉強食」の世界が厳としてあることは、否定しない。しかし、百獣の王・ライオンといえども、飛行機に乗って世界中に出掛けていき、そこで弱い者を食い散らすといったようなことはしないのである。

私たちは、自然界で、気が遠くなるほど長い期間にわたって生まれ、蓄積されてきた知恵に、もっと謙虚に学ばねばならないところがあるのではないだろうか。

現在のままの文明社会を継続していけば、おそらくは、この人類社会は行き詰まることになるだろう。そして人々は、自分を取り巻く環境の悪化に苦しむというのみならず、自分で自身の存在意義を認めることができず、さらに自らの存在場所を見失って、自ら滅び行く道を進んでいくということになるのではないかと、危惧を抱いているのである。

このような基本問題に対して、私は、新たな文明社会像を描き出してみたいと考えている。それが、今模索し続けている「人間の森文明」ということなのである。

■■■ 「人間の森文明研究所」の研究課題 ■■■

この目的のもとに行われる「人間の森文明研究」が、今後取り組むべき課題は、現段階で考えると、次のようなものになるだろうと思う。

1. 「人間の本性・存在意義と幸福感」の研究

先に指摘した通り、今現在の人類社会が抱える根源問題は、その文明形態が、年とともに人間の本性と乖離したものとなってきているという点にあると考えている。この問題を考えるには、まずその「人間の本性・存在意義」を明らかなものとする必要がある。そしてそれを示唆するものが、人々が胸に抱く「長期間にわたって続く幸福感」にこそあると、私は考えているので、その「幸福感」に関しても、研究を進めていきたいと思う。それは、とりもなおさず、人間の「知徳体」が、「三位一体」の形で整えられることにより、人間が本来持つ「生きる力」が、外に自在に発露される状態なのではないかと考えている。

2. 「日本における様々な社会課題を解決するビジョン」の描出

そして、現代社会に生まれてきている諸問題が、その社会が立脚する足場の不具合によって生じてきているものだと考えるならば、新たな足場の基に、これからの社会ビジョンを統合的に描き出せば、様々な問題に対して、その解答を準備することができるはずである。そこで、今の日本社会に生まれている重大な問題について、その解決を目指すビジョンを描き出していきたいと思う。例えば、過疎過密問題、少子高齢社会問題、未来世代に対する責任問題（財政問題、環境問題など）、地域コミュニティ再生問題などである。これら課題に、新しい視点からのビジョンを描き取り組みを進めたいと思う。

3. 「地球社会に新たな秩序を生み出す文明像」の探求

この頃、「米中冷戦」という言葉がよく使われるようになってきた。そして、世界を大きく分断し、厳しく対立する世界の姿が、いろいろな場面で垣間見られるようになってきている。この対立の原点には、競争の中で勝ち残るものこそが「正義」を体現するものであり、その正義が世界に君臨することこそが、人類社会にとって最も好ましいことであるという考え方があるように思う。しかし、現実の自然界は、多様な個性を持つものが併存しつつ調和しているのであり、私は、多元的な正義が並立できる文明の姿を追い求めてみたいと思うのである。これはいわば、「一神教」ではなくて、「多神教」の世界を、いかに現実のものとしていけるかという探求でもあろうと思うのである。

4. 「日本の思想を世界に展開する可能性」の研究

そして以上に述べてきたことを、現実的に一つのものとなってきつつある人類社会全体に敷衍していこうとするならば、「日本の思想の世界への展開」ということも考えなくてはならないのではないかなと思う。様々な個性を、あまり大きな葛藤や対立を生み出すことなく受容し、それらを自らの内で消化し、さらにそれらを調和の相に導いていく、そんな日本人の不思議な能力を、日本人は古代から持ち続けてきた気がするのである。そんな特質を、これから先に、どう現代社会に展開して、この人類社会をいかに妙なる新しい調和の秩序に導いていくのか、そんな問題にも、これから取り組んでみたいと考えているのである。

(令和2年10月13日現在の整理)

■ 若葉書院に宿された様々な物語⑨ ■

「若葉書院」には、この場での様々な活動の中で、多くの物語が生まれてきている。



この「ウラジロガシ」は、若葉書院が開設された時に、この若葉書院が立地する新宮村(当時)新瀬川地区の皆さん方から、プレゼントされたもの。「増長天樹」と命名している。



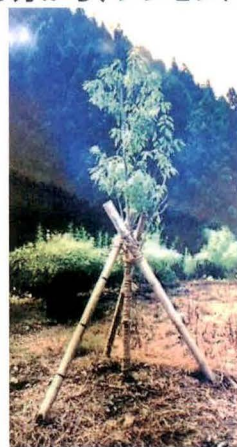
若葉書院玄関の壁面に掲示している絵。「増長天樹」が、大地深くに太い根を張り、そこからすつくと幹が立ち上がっている姿を連想させてくれる。この樹木の周りには、嵐が吹き荒れ、もう一方には太陽が輝いている…、そんなイメージを与えてくれる抽象画なのである。

今回は、「若葉書院・低気圧論」に関係するものをご紹介します。

この「若葉書院・低気圧論」を象徴するのが、左写真の「ウラジロガシ」である。葉っぱの裏側が白っぽくなっていることから、こう命名されたという、「OAK・TREE」の一種である。

この樹木は、若葉書院が開設された平成9年(1997年)に、この若葉書院が立地する新宮村(当時)新瀬川地区の皆さん方から、プレゼントされたものであった。

その植樹直後の写真が、右である。この頃には、まだ私たちの背丈より少し高い程度の幼木であった。それが、23年の年月を経て、左の写真のように、堂々とした樹木となったのである。



その太い幹、そして大きく広がる枝葉を見ながら、私は、この若葉書院に、世界中から、または、時を超えて集まってくる「知情意」を集約し、それらを混合融合して生まれてくる新しい知恵や心情、そして意志が、この樹木から、天空高く吹き上がっていくという心象風景を得て、この樹木に「増長天樹」の名を与えたものである。

つまり、この土地において、長い年月をかけて育んできたものを、ここから天空に吹き上げ、偏西風に乗せて世界中に広げてゆくシンボルとして、この樹木に、その物語を与えたのであった。

その樹下には、ここに集う人たちが自由に議論し合う「アゴラ」も作った。多くの人の知恵や思いを、ここで融合することを願ったからであった。

そして、この「増長天樹」を抽象画として描き出しているのが、左の絵画である。大地深くに太

このような物語は、若葉書院の存在意義をそれぞれが語り伝えるのではないか。



ヒンズー教の空飛ぶ神鳥「ガルダ」の像



七福神が乗って、世界中に幸福を伝えていく「宝船」



全宇宙に、そして「未来に、私たちの願いが広がっていくことを念じて置いている「ロケット模型」。

い根が張っていて、そこからすくと幹が立ち上がっている。その周りには嵐が吹き荒れ、もう一方には太陽が輝いている、というイメージを、私たちに与えてくれる絵である。混沌とした世相の中に、私たちが取り組んでいる活動が、やがては大樹となって、多くの人々を勇気づける日がやってくることを予感させてくれる絵である。この絵は、若葉書院玄関の壁面に掲示している。

そして、若葉書院の教室には、この若葉書院で育まれる「知情意」を世界に運んでいこうとする、その運搬手段を、シンボルとして置いてある。それが左に掲示した3つの写真である。

まず一番上の写真は、ヒンズー教の神鳥「ガルダ」の像である。「増長天樹」から吹き上がる風に乗って、このガルダが、伝道者を乗せて、世界各地に飛び立っていくのである。このガルダは、東南アジアの各地で、聖鳥とされ、国威の象徴ともされているらしい。

2番目に掲示してある写真は、見てお分かりの通り、宝船である。この船に七福神が乗って、世界中に幸福を伝えていくのである。これは、若葉書院横を流れる「大河・吉野川」の源流地点より発して、紀淡海峡に流れ込み、さらにそこから太平洋に注がれて、黒潮に乗って世界に広がっていくという心象風景に結びつく。

そして一番下の写真は、この地に生まれる「知情意」が、地球を離れ、全宇宙に広がっていく願いを込めた、ロケット模型である。左側が、日本初の実物大「ペンシルロケット」、そして右側が現在主力の「H II 型ロケット」の200分の1模型である。これらは、地球を離れるというのみならず、時を超えて未来へ伝わるものであってほしいという願望を孕んだものである。

このように、若葉書院は、この地に集まり、さらに反応し合って生まれるものが、世界に、そして未来にも広がっていくという物語を持っている。もっとも、まだ現段階では、とてもではないが、そんな力が備わっていないことを白状してはならないが、それでも、壮大な夢だけは、今後も持ち続けたいと考えているのである・・・。■

活動レポート

新政の森

「砥部中学校一年生に対する講演」



砥部中学校で、「自分の花を咲かせよう ～坂村真民先生の祈りと詩」というテーマで講演を行いました。

10月2日（金）、松山市のすぐ南に隣接する砥部町のただ一つの中学校「砥部中学校」で、中学一年生を相手に、約1時間の講演を行いました。そのテーマは、「自分の花を咲かせよう ～坂村真民先生の祈りと詩」というものでした。

仏教詩人として広く知られている坂村真民先生（1909～2006）は、戦前戦中に朝鮮で教鞭を執られた後、愛媛に引き上げてきて、まず宇和島近隣地域で教育に従事します。そして昭和42年（1967年）、58歳で、松山市の高校に移ったときに、砥部町に居を構え、それ以降、この場所で生活をしながら、数多くの詩を書き残しました。愛媛県教育文化賞や砥部町の文化功労賞などを受賞し、平成19年（2006）に、享年97歳で逝去。その後、平成24年（2012）には、この地に「坂村真民記念館」が開館し、今も、その詩を愛する数多くの方々が、全国から、先生のご遺徳を偲んで訪れています。

昔からよく「近き者喜びて遠き者来たる」と言われます。坂村真民先生が後半生を過ごされたこの砥部町の若き人たちが、先生の人生と詩とを深く理解し、その生き様や考え方に深い敬意と喜びを感じずらなくなってこそ、先生が残された思いや祈りが、さらに広く多くの方々に伝わっていくことになるのだろうと考えて、この講演を行いました。その思いが、少しでも多く、今回聴講していただいた一年生の皆さんの心に響くものがあればと願っています。

なおこのときの講演は、これからテープ起こしや編集作業を行って、多くの方々が読んでいただけるように、冊子として発刊したいとも考えています。その時には、是非、皆さんにもご一読いただければと思っています。

9月17日(木) … 「人間の森大学」で、「西田幾多郎の人生と思想」を語る



9月の「人間の森大学・オンライン勉強会」では、「日本を代表する哲学者・西田幾多郎の人生と思想」を取り上げて、お話をさせていただきました。今回も、参加者は約20名。新しい方々の参加も何名かありましたが、勉強会を重ねる中で、参加メンバーも、ほぼ固まってきたという印象です。今後も、おおよそ月に1回、このオンライン勉強会を開催する予定ですので、今後も、関心をお持ちの方々のご参加を楽しみにしています。

9月27日(日) … 人間哲理研究会で、『これから20年、3極化する衰退日本人』を読む



『これから20年、3極化する衰退日本人』を論じました。

9月の「人間哲理研究会」では、中野雅至著『これから20年、3極化する衰退日本人』という本を取り上げました。これからの激動の時代に、日本社会で、さらに衰退現象が顕著となり、また閉塞感が強まってくる中で、日本人がいかに生きていくべきかという問題を論じている本でした。この勉強会の内容につきましては、今後の羅針盤コーナーで取り上げていますので、関心をお持ちの方は、それをご覧いただければと思います。

10月2日(金) … 砥部町での「遊行脚活動」～広田地域への再訪問など



「道の駅」の風景。新しい取り組みが行われていました。



人口減少が続く広田地区には、かつてここに中学校があったことを示す石碑がありました。

砥部中学校での講演の機会に、山村の広田地区を再訪問いたしました。前号でも書いたとおり、この地区は、急速な人口減少と高齢化に見舞われていて、今後の展望をなかなか描きにくい状況になってきています。そしてその姿は、日本各地の山村に共通する課題でもあると思うのです。

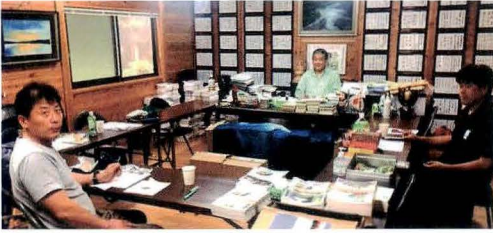
そこで今回も、この地区の交流センターや道の駅などを訪れて、お話を聞かせていただくと同時に、今後の可能性について、思いを巡らせました。そしてその後、砥部町の佐川秀紀・町長にも久しぶりにお会いして、短時間ではありましたが、意見交換を行いました。

これまでの日本は、あまりにも合理化だとか、効率化だといったことを重んじ過ぎた国づくりを行い、また一人ひとりも、必要以上に都市的な環境整備を求め過ぎたのではないかと思います。

そしてその結果、都市的環境が整わない地方は、魅力がないとされ、過疎化が進み、日本の国全体が、そのアンバランスに苦しんでいるのです。

今後の日本においては、このような過疎地も存在意義を持ちながら育まれるような国づくりを考えていかねばならないと思いました。

10月4日（日）…トレンド勉強会で、『世界の終焉へのいくつものシナリオ』を読む



テーマは、『これからの20年、3極化する衰亡日本人』



青野眞さんが、敷地の草を刈っていただきました。

10月のフォレスト・トレンド勉強会で取り上げたのは、ジョエル・レヴィ著『世界の終焉へのいくつものシナリオ』という本でした。

今の地球人類は、いろいろな難題、例えば、地球温暖化、感染症パンデミック、巨大台風・超火山等の自然災害、テロ、大量移民などの難題を抱えて、呻吟しています。このような問題に対して、いかに対応していくべきか、その思索のきっかけを与えてくれる本だと思いました。

この勉強会についても、今号の羅針盤コーナーで取り上げていますので、関心がある方は、それをご覧になってみてください。

なおこの日は、青野眞さんが、自分の草刈り機を持ち込んで、若葉書院敷地内の草刈りを行ってくださいました。左写真の二宮金次郎像も、この夏に生い茂った草の中に埋もれかかっていたのですが、きれいに見えるようにしてくださいました。ご奉仕に、心から感謝申し上げます。

10月6日（火）…あかがねミュージアムで開催中の「真鍋博の贈り物展」を見学する



「真鍋博の贈り物」展の入り口看板

この日は、新居浜市の「あかがねミュージアム」で開催されていた「真鍋博の贈り物」展を訪れました。真鍋博さんは、昭和7年に、かつて別子銅山があった山中でお生まれになりました。小さい頃から絵が好きで、さらに高校生時代に、大きな人生の出会いもあって、絵の道を志して学び、日本を代表するイラストレーターとなりました。

私も生前にお会いしたことがあり、この機会に、その足跡を振り返ってみたいと訪れたのでした。

一時代を風靡した一人のイラストレーターの人生に触れて、様々なことを思考えた時間でした。

10月11日（日）…人間論ゼミで、執行草舟著『悲願へ～＝松下幸之助と現代』を考える



10月の人間論ゼミでは、執行草舟著『悲願へ～松下幸之助と現代』という本を取り上げて、松下幸之助の悲願とは一体何であったのか、ということ、参加者と語り合いました。

特にこの本で取り上げられている「新しい人間観の提唱」の奥に潜む松下幸之助のすさまじい生き様や考え方には、深い感動を覚え、また考えさせられました。この内容につきましては、次号の羅針盤で取り上げたいと考えています。

なお、前号ご案内で、著者名「執行草舟」を「草船」と誤記してしまいました。ここに訂正させていただきます、お詫び申し上げます。

“ホームページ”と“森風ネット通信”のご案内



インターネット上に、“OAK・TREE運動ホームページ”を開設しています。アドレスは、次の通りです。

<http://oaktree.my.coocan.jp/>

勉強会日程についても、こちらのホームページに掲載しておりますので、関心をお持ちの方は、時々覗いていただければ幸いです。

また、“森風ネット通信”というタイトルで、週に一回程度、勉強会のご案内メールを配信しています。受信をご希望の方は、ご連絡ください。

OAK・TREE誌購読のお願い

「月刊OAK・TREE」誌は、当初目標とした400号を越えて、これからは、新段階の冊子づくりを目指し、より自由に発想して、人間の生きざま・考え方や、日本・世界の在り方を描き出していきたいと考えています。いよいよOAK・TREE運動が、真にこの日本の国や世界に力を尽くす段階にやってきたとも考えています。

このOAK・TREE運動の趣旨にご賛同頂ける方には、是非、「月刊OAK・TREE」のご購読を賜り、この運動をお育て頂きますよう、お願い申し上げます。

『月刊OAK・TREE』年間購読について

- ◆ 年間購読料 5,000円 [年間12号]
- ◆ 購読料お振込先 [ゆうちょ銀行] 01670 - 5 - 76693 小野晋也
・他の金融機関からの振込口座番号は、 -六九(イチロクキユウ)店(169) 当座 0076693

申込先・「榎樹舎」・電話・(0897)43-1104 FAX・(0897)43-1139
 ㊟792-0856 愛媛県新居浜市船木甲1257-8 メール・oak-tree1984.4@nifty.com

大久保便り



10月初旬のある日、私が生活している大久保地区で散歩をしていますと、どこからともなくキンモクセイのかぐわしい香りが漂ってきました。普段は、この地区にどのような木があるのかなどと、あまり意識してこなかったのですが、この香りがあまりに心地よいものであったので、この日は、散歩をしながら、その木を探してみました。すると、榎樹舎からおおよそ100メートルくらい離れた、私がよく知っている方の家の庭に、その大きなキンモクセイの木がありました。それが左の写真です。

その庭の奥には、柿の木の畑もあり、多くの実が、たわわに実っていました。

10月初旬といえば、もう晩秋。少し前まで厳しい暑さだと語っていた気温が、あっという間に下がり、涼しくなって、朝夕には寒ささえ覚えるようになってきました。

11月6日には、もう立冬。冬の入り口です。「歳月は人を待たず」…、ですね。

9月人間哲理研究会(9月27日)

中野雅至著『これからの20年、3極化する衰亡日本人』を読む



9月の人間哲理研究会で取り上げたのは、中野雅至著『これからの20年、3極化する衰亡日本人(扶桑社新書125)』という本であった。

著者の中野雅至氏は、東京オリンピックが開催された1964年に生まれているから、今年、56歳になる。興味深いのは、その経歴であり、最初、奈良県の大和郡山市の職員として就職するのであるが、そこから国家公務員試験を受けて合格、労働省に身を転じ、様々な企画立案などにも従事したようである。そこから2004年に、兵庫県立大学大学院に転職し、さらに今は、神戸学院大学・現代社会学部で教授を務めておられる。著書も、数多くあるようである。この経歴を見ると、常に新しい道を追い求める志向性の人のようである。

今回取り上げた本は、今から約8年前に出版されたものである。この頃といえば、自民党の麻生政権から、民主党の鳩山政権に「政権交代」が行われた時期。数多くの困難が予見される中で、新たな社会のあり方が模索されていた時代である。

著者は、この著書の中で、日本は既に、格差社会ではなく、衰退社会であると断じている。そして、日本人は、この混乱の中で、今後は、人々が政治に強い関心を持つことになるに違いないとし、その理由を次のように書き記している。

「これから20年、日本人がどうして政治に熱くならざるを得ないのか、その構造を説明することにしよう。結論から言えば、不況がさらに深刻化するからだ。それも政治家が常套句でうなる改革程度ではどうしようもない理由で、どんどんと衰退していくからだ。そのため、日本人は苛立ち、ストレスをためるとともに、社会は今以上の閉塞感に覆われる。その結果、閉塞感の打開を政治に求めるのだ(pp.116~117)」と。

そしてその衰退の背景に3つの大きな社会の流れがあるとして、次の3つを挙げている。

①グローバル化・IT化・アウトソーシングの3つの流れの加速。

②企業の海外流出の本格化。

③少子高齢化と人口減少の影響。

そしてこの3つの要素が複雑に絡まり合いながら、経済不況はさらに深刻となり、日本社会全体が衰退の悪循環に入っていくというのである。つまり「長期不況による停滞が続き、慢性的に賃金は低下し、失業率は高止まりすると、多くの人が政治に依存せざるを得ない(p.134)」ようになると主張しているのである。

しかし、その問題解決を求め、政治に多くを期待しても、頭で考えてみるだけでも、そんなことは不可能だということがわかる。そしてその結果、「多くの日本人は思考停止に陥るだけでなく、やがては何でもOKというようになり、突拍子もない巨大な計画に自暴自棄な期待を合わせて、自ら過去の遺産をどんどんと切り崩していく(p.137)」だろうというのである。そして、『『冷静になろう』と訴えかける政治家や学者や官僚は『守旧派』というレッテルを貼られて、マスコミから厳しい追及を受けるようになる。この守旧派のレッテル貼りで、最も被害を被るのは大学教授を中心とした知識人である(p.137)」とも主張するのである。

こうして日本は、「このように自暴自棄な社会では、人々の考え方・見方はすべて短期的で近視眼的なものになる。とにかく生活が苦しく余裕がないため、長期的視点から考えることが難しくなる。長期的視点から物事を眺めることができるのは、余裕があるか、未来に希望が持てるかのどちらかだが、この時代の日本人にはどちらもない(p.141)」ということになるだろうと、これからの時代に警鐘を打ち鳴らすのである。。

そして、そのもやもやとした気持ちの中で、日本政治は、極右と極左の両翼の政党が登場し、それらの対立の中で、結局は極右政党が政権を担うことにもなりかねないという見通しを示している。

そこで、このような混迷の時代が避けられないとするならば、社会改革とともに大切なのは、この衰退社会をいかにうまく乗り切り、そこから社会にも新しい展望を切り拓いていく人を育成することしかないだろうと論じているのである。

著者は、ここに、グローバルに、そしていかなる変化にも対応して生きられる「メンタルの力」の重要性を論じている。有益な本であったと思う。 ■

10月フォレスト・トレンド勉強会(10月4日) ジョエル・レヴィ著『世界の終焉へのいくつかのシナリオ』を読む



今回、フォレスト・トレンド勉強会で取り上げたのは、イギリスのサイエンスライターであるジョエル・レヴィ氏の著書『世界の終焉へのいくつかのシナリオ』であった。

なぜこの本を取り上げたかといえば、この本は、2006年出版であり、今からもう14年も前の本であるにもかかわらず、今世界に襲いかかっている「新型コロナウイルスのパンデミック」を見事に予測していたからであった。そしてそれと同時に、今後人類が遭遇するであろう「世界の終焉に結びつきかねない危機」について、28項目にもわたる問題状況を列挙しているのだから、それらのそれぞれについて、確かに私たちが意識すべき重要な示唆を与えてくれているからでもあった。

今回の勉強会では、この本は先にも述べたとおり、余りにも多くの問題を取り上げて幅広く論じている本であったので、一部だけを論じた。まず、人類社会を破滅に導きかねない危機について、それを予見し、評価することの重要性を論じている「はじめに」の部分と、ウイルス感染症による「パンデミック」を論じている部分(スーパーバグ問題、AI暴走問題を含む)、そして、地球全体の環境が急速に悪化している状況を論じている「汚染されゆく地球」の部分だけを取り上げた。

まず「はじめに」の総論部分であるが、ここでは、私たちの地球社会には、実に数多くの危機が現実存在していることを認識する必要性を論じた上で、それらの危機の正確な特質を解説し、そのシナリオが現実となった場合にどんな結果が待ち受けているのか、その同じような危機に対して過去の文明はどう対応したのか、そしてそれがどの程度の可能性として、今後出現しそうであるのか、などを分析し、「現在の先進国世界のような文明が、どのように崩壊するのか、あるいは少なくとも日常生活が本質的に移転してしまうほどの打撃をどういった形で受けるのか(p.18)」ということを論点にすることを明らかにしている。そして、この危機を4分類し、それらを紹介しているが、その4つとは次の通りである。

- ①実験室や研究所から出現する危機シナリオ
- ②軍事と政治の世界に由来する「地球最後の

日」シナリオ

- ③人類による活動が地球生態系に及ぼしている危機シナリオ
- ④自然現象が生み出す危機シナリオ

先にも述べたとおり、この本で取り上げている「人類終焉の危機」は、実に28項目にも及んでいる。この誌面で、とてもそれだけの問題を論ずることはできない。そこで、総論的に、私が思い考えたことを以下に書き記すことにしたいと思う。

第一に感じたことは、私たちは通常、あまり強い危機感を持つこともなく、日常生活を過ごしているが、その足場は、極めて脆いものなのかもしれないということである。そしてそんな認識を持つことが必要である。私たちは、大地震が起きたり、強い台風が来襲したりすると、その度に驚き、慌てふためくのであるが、それらは、潜在的な可能性として、そのほとんどが事前に予見されているものである。だから、いつそれが起きるかまでは分からないとしても、ある程度の備えは可能であり、そんな事態発生に備えての検討だけは怠らない必要があるのではないかと私は思った。

第二には、これだけ多種多様な潜在的な危機が潜んでいるとすれば、これらが単独で問題を引き起こすのではなく、いくつかの要素が同時に問題となって現れてくる事態も考えておかなければならないということである。

これには、膨大なケーススタディーが必要となるだろう。それは人間の解析能力をはるかに超えたものであり、コンピューターのAIを活用した予測を行うと同時に、現実にもその問題が生じたときには、コンピューター上でのシミュレーションが即座に行えるように、その準備を行っておくことが必要ではないかと感じた。

第三には、私たち自身の気構えである。

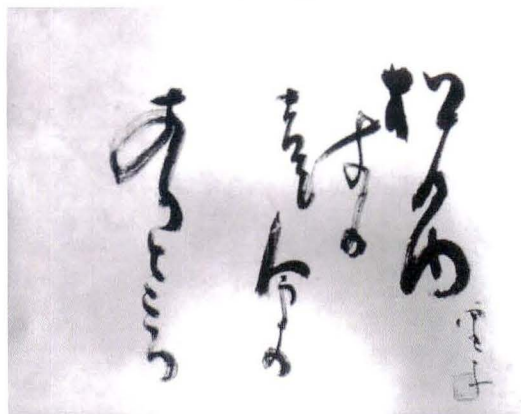
先に私達は危機感をあまり持たない生き方をしているのではないかと問題提起したが、何だっで起こりうるのだという意識を常に持つ必要があるのではないだろうか。そして何らかの事態が起きたときには、一人ひとりが、冷静に、そして的確にその事態に対応できるような気構えを養っておくことが重要であると思う。そしてそれと同時に、危機においては、日常では考えられないような協力体制が求められることもあるだろう。そんな協力体制を短時間のうちに立ち上げるための足場も準備しておく必要があるような気がした。

私たちの社会が孕む諸問題を知り、様々なことを考えさせられた勉強会であった。 ■



「高浜虚子の俳句」

～「松の内 鼓の会 在りどころ」～



在松の
りのの
ど会内
虚子の
この
印ろ

今回取り上げる書は、俳句文芸誌「ホトギス」を拠点に活躍し、近代俳句の発展に大きな足跡を残した高浜虚子(1874~1959)の句幅である。

「松の内 鼓の会 在りどころ」

という虚子の俳句が、流麗な筆で書かれている。

虚子の本名は、清。俳号の「虚子」というのは、この本名「清」の読みから、師事していた正岡子規によって、命名されたものだろうである。

虚子は、生涯に20万句を超える膨大な数の俳句を詠んだとされる。そんな虚子も、子規の没後には一時俳壇を離れるのであるが、「五七五調」にとらわれない新傾向俳句が広がるのに対して、俳句はやはり伝統的な五七五調で詠まれるべきである、と主張して、俳壇に復帰。以来、かつて親友であった、新傾向俳句を主唱した河東碧梧桐と、激しく対立したという。

虚子は、「客観写生」を旨とする平明で余韻のある俳句を主張した。

今回取り上げた俳句は、まさに、そんな虚子の作風を強く感じさせられるものだと思う。

「松の内」というのは、門松が置いてある間、という意味であるから、端的に言えば、「お正月」ということになるのだろうと思う。

そして、「鼓の会」というのは、古代から雅楽の楽器として使われてきた「鼓」の奏者がたくさん集まってきて、みんなで一斉に、その「鼓」を演奏する会のことである。

私は、この「鼓の会」というのをこれまで観たことがなかったので、インターネットで調べてみると、そこには、いくつかの動画が出てきた。それを視聴してみると、舞台上に数多くの「鼓奏者」が集まって、みんなが一斉に掛け声をかけながら鼓を叩くのである。そこには、三味線や笙、太鼓なども加わっていたが、その音調というのは、リズムカルであると同時に、ゆったりと流れる悠長さも兼ね備えていた。その演奏を聴いていると、とにかく心が晴れやかになってくる快い響きである。

そして聴覚だけでなく、視覚的にも、数多くの鼓奏者が一斉に鼓を叩く姿は、その手の動きが見事に揃っていて、見事なものであった。華やかという表現が的確かも知れない。

それは、新年の清々しさとよく響き合うものであると思う。だから、虚子は、日本のお正月というのは、まさにこの「鼓の会」にとってもふさわしい場所(「在りどころ」)だ、と率直に、この俳句を詠んだのではなかろうか。

簡明な俳句である。しかし、この俳句を胸に抱くと、お正月の華やいだ気分の中で、どこからともなく「鼓の会」が演ずる調べが聞こえてくるような情景が臉に浮かぶ俳句である。これぞ、虚子の目指した俳句の境地ではなかつたらうか…。



11月月間活動目標と9月の足跡

【基本姿勢】

令和2年11月。「新型コロナウイルス」問題に振り回された感の強い令和2年も、もう残すところが2カ月である。この11月も、「With Corona時代」の経済や社会に思いを巡らせながら、今後の社会・文明展望を描き出すことに、力を注ぎたいと思う。今月も、よろしく願い申し上げたいと思う。

- 1、11月も、各地に「遊行脚活動」を行いたいと考えている。そして、新型コロナウイルス問題でさらに疲弊している地域に、新しい可能性を見出していきたくと考えている。
- 2、この11月も、「これから予想される大きな混乱の中から、新しい文明を切り拓く活動に力を注ぎたい。「人間の森文明」を世に問いかける活動も、力強く進めたいと考える。
- 3、「日本ビジョン描出活動」は、もう9年目となる。日本社会に変化が生まれる中で、国の在り方を考え抜き、「幸福」に足場を置くグランドデザインを描き上げていきたくと考える。
- 4、11月28日(土)には、来年が熊沢蕃山没後330年の記念年にあたることから、岡山県備前市において、それを記念するシンポジウムが予定されていて、そこで基調講演を行うことになっている。この機会に、「先人顕彰の意味」について、私自身の思いを深めてみたいと考えている。
- 5、来年に向けて、どのような取り組みを行っていくか、思いを巡らせてみたいと思う。
- 6、OAK・TREE誌の誌面を一新するとともに、運動全体の在り方にも、思いを巡らせたい。
- 7、砥部中学校での講演内容を取りまとめて、冊子を作ろうと考えている。その冊子の編集作業などを行って、11月には、発刊したいと考えている。
- 8、樞樹舎や若葉書院の整理・整備作業を更に進めていきたい。
- 9、定例勉強会も、内容の充実が図られてきている。これら勉強会を地道に続けていきたい。
- 10、OAK・TREE12月号を、11月13日(金)までに投稿する。

● 9月の活動において、残すことのできた5つの大きな足跡 ●

1. 9月17日(木)、入院中であった母が逝去。その後の一週間は、母の葬儀などの対応にあたった。
2. 9月10日(木)は、10月2日の砥部中学校での講演打ち合わせのため、砥部町を訪問。その機会に、同町の広田地区、また、内子町の小田地区などの山村部の遊行脚活動を行った。山村地域の衰退ぶりに驚き、これからの対応の必要性を改めて強く感じた。
3. 9月の勉強会は、トレンド勉強会は台風10号のため中止。人間論ゼミは、「西田幾多郎の人生と思想」、人間哲理研究会は、「中野雅至著『これから20年、三極化する日本人』」。それぞれに、考えさせられる論点が多い勉強会であった。
4. OAK・TREE10月号を、9月15日(火)に投稿。読者のお手元には、9月末から、10月初めのお届けとなった。



1日1イラ短マラソン



在野の活動・発想イラ短日記

ホームページへのアクセスもお待ちしております <http://iratan.cocolog-nifty.com/blog/>

2006年10月1日に「1日1イラ短マラソン」がスタート！それからもう14年となりました。
 “夢出せ！ 知恵出せ！ 元気出せ！”をスローガンとする「ゆちげ運動」を象徴するものとして、
 在野の経世家としての活動ぶりとその中で生まれたアイデアなどをイラ短でご紹介してきました。その
 総数は、既に、5000作を超えています。これらの中に含まれるアイデアを、読者皆さんによって、更に
 発展させていただけることを期待しています。

日英は 9月11日 英欧間では
経済協定 (金) 対立深まる
合意に向かい

イギリス・約束が違うよ！

9月11日(金)

この日、茂木敏夫・外務大臣とイギリスのトラス・国際貿易大臣がテレビ電話で会談を行い、日英経済連携協定(EPA)締結問題で、大筋合意。今後、署名と議会の承認を経て、来年元日に発効することを目指すという。

その一方で、イギリスは、EU離脱に伴う通商交渉も行っているが、こちらは難航しているという。ジョンソン政権が、もうすでにEUとの間で発効している離脱協定について、その一部を修正する国内法案を議会に提出するなど、新たな火種が生まれているからである。長い間、国際政治においてリーダーシップを振ってきたイギリスからぬ対応には、国内からも強い批判が生まれているという。

「貧すれば鈍す」ということが。こんな様子を見ていると、ミニトランプとも言われたジョンソン首相が率いるイギリス外交は、今後迷走を続けるのかもしれない……。

バー上かり 9月12日
レーンなかる (土)
中東に

早く来い！

9月12日(土)

トランプ・米大統領は、この日、自分が仲介する形で、イスラエルとバーレーンが国交正常化に合意したと発表。少し前には、アラブ首長国連邦(UAE)が同様の合意を行っており、この15日には、ホワイトハウスで、この両国とイスラエルの合意署名式が行われるという。トランプ政権が、この合意成立の裏舞台で、いかなる密約を交わしたかは明らかになっていないが、これまで対イスラエル外交において、結束を誇ってきたアラブ諸国の間に大きな亀裂が生まれ、中東に新たな火種が生まれることにもなりそうである。

このような動きを警戒しているのは、イランであろう。これまでも、エジプトやヨルダンが、国交を結んできたが、今回は、ペルシャ湾を挟む隣国・2カ国が、アメリカの反イラン包囲網に加わることになったのである。「要らん(イラン)戦争の懸念が広がってきたかも。

哲学は 9月13日(日)
驚きじゃなく
人生の 悲哀からだと
西田幾多郎

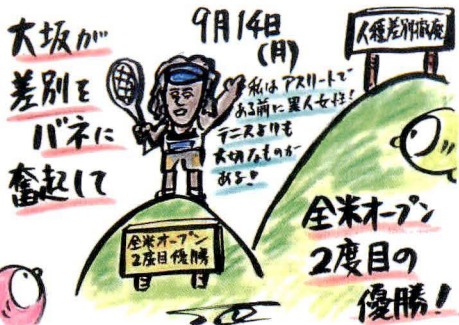
親しい人の死
病氣に悩む
妻の死
長男の死

哲学の動機は「驚き」ではなくして「深い人生の悲哀」でなければならぬ

9月13日(日)

「人間論ゼミ」。「西田幾多郎の人生と思想」がそのテーマであった。西田幾多郎は、明治時代後期から昭和時代初期にかけて活躍した、日本を代表する哲学者。禅を足場として、日本独自の哲学体系を打ち立てようとした。

この西田の人生を振り返ってみると、若い頃から数多くの悲哀の中で生きてきたことがよくわかる。幾度も自らの病によって挫折をしている。若い頃から、兄弟姉妹に死に別れ、さらには壮年期以降も、妻や愛する子供達を次々に病によって失う。そんな中で吐露されたのが、「哲学の動機は『驚き』ではなくして、深い人生の悲哀でなければならぬ」というよく知られた言葉であった。その悲哀の中にあつてこそ、自らのありとあらゆる捉われ心を離れて、自らを無にしつつ、その本質的な根元に到達することができるのだ、そう語っているようだ。



9月14日(月)

テニスの世界4大会の1つ、「全米オープンテニス大会」で、大坂なおみが、アザレンカを破って、2度目の優勝を果たした。

大坂は、この大会直前に、警察官による黒人殺害に強く抗議して、この大会の参加を辞退する発表を行った。その後、主催者の対応に応じる形で、参加を決定したものの、この大会では、自らが身に付けるマスクには、これまで警官によって殺害された被害者の名前が入っていた。7枚のマスクを用意して、その全ての名前を世界中の人々に見せたい、と自らの優勝への意欲を示していたのであった。

言うならば、今回の優勝は、大坂が胸に抱く黒人差別問題をバネにして、勝ち取ったものだと言えるものかもしれない。テニスよりも、もっと人間として大切なものがある、という大坂のメッセージは、確かに多くの人々の心に響いたのではないだろうか。



9月15日(火)

昨日、新しい自民党総裁に選ばれたばかりの菅義偉・官房長官が、今日は、自民党の幹部人事を行い、二階幹事長を再任するとともに、佐藤勉・総務会長、下村博文・政調会長などを新たに任命した。そしてそれと同時に、新しい内閣人事にも着手。閣僚に内定した人たちの名前が次から次へと報じられている。

それにしても、夜のニュースで全閣僚の名簿が紹介されたことには、大きな違和感があった。組閣本部は、正式に内閣総理大臣に指名された後に設けられるものである。総理にまだ決定していないのに、新内閣の名簿が全て明らかになるというのはいかがなものか。

この頃は、赤ちゃんが産まれる何ヶ月も前に、その赤ちゃんの性別や病気なども分かるという。少しでも早く知りたいという親心はわからないではないが、こんな先走りに、どれほどの意味があるというのだろうか…。



9月16日(水)

この日の夜、皇居での首相親任式と閣僚の認証式を経て、菅内閣が正式に発足。日本政治の顔が、安倍氏から菅氏へと引き継がれ、日本政治は、新たな船出となった。ここに至るまでの道筋は、極めて順調であった。国民からの内閣支持率も高そうである。

しかし、それは、これから先の穏やかな航海を意味するわけではない。新たに船出した「菅義偉内閣丸」の行く手には、数多くの暗雲が垂れ込めている。新型コロナ問題は未だ解決していない。来年にはオリンピックやパラリンピックもある。さらに経済は、ひどい落ち込みを示している。様々な災害も起きた。米中の激しい対立の中で、日本の進路が厳しく問われている。政治倫理の問題もある。加えて、巨額の赤字を抱える財政問題や行政改革などの困難な問題もある。

早速、菅船長の力量が問われる場面だ。



9月17日(木)

この夜、母の訃報が飛び込んできた。母は数年前から体が弱ってきて、自分の足で歩けなくなったことから、老人ホームでの生活となっていた。少し前にそこから病院に移り、入院加療を受けていた。時折病院から病状を聞いていたのであるが、大分良くなってきていると報告を受けた直後の、この報せであった。享年は90歳。近年の体力の弱まりからすると、天寿を全うしての旅立ちであったと思う。

しかし心残りも、この約半年間、ほとんど面会も叶わず、たった一人で黄泉の世界に旅立たせてしまったことである。これはもちろん、新型コロナウィルス対策で、施設や病院の厳しい防疫態勢によるものであったが、家族としては、本当に辛いことであった。

それに詫げる気持ちも込め、この夜は、久しぶりに帰宅した母の横で、一夜を過ごした。様々な思い出が、頭の中を駆け巡った…。



9月22日(火)

イタリアで、国会議員の定数削減を問う掛ける国民投票が行われ、その結果、賛成票が約7割になり、これまで上下院合わせて945あった議席が、600議席にまで削減されることとなった(上院の315議席が200議席に、下院の630議席が400議席になる)。

この国民投票は、2年前の総選挙後に連立与党入りした市民政党「5つ星運動」が、既得権益打破のシンボルとしてきたものであった。そして、コロナ危機などもあって厳しさを増している国家財政への懸念も加わり、国民がそれを強く支持したと思われる。

この財政困難は、イタリアだけではなく、世界各国でもとて深刻な状況に陥っている。今回のイタリアの議席削減の動きは、おそらく世界に波及していこう。日本もその例外ではありえない。また政治改革の御旗が打ち振られる賑やかな時代となってきそうである。



9月23日(水)

国連総会の一般討論演説が始まり、アメリカのトランプ・大統領は、いま世界に蔓延する新型コロナウイルスを「中国ウイルス」と呼び、「この感染症を世界に広げてしまった中国に責任を取らせなければならない」と強く非難した。それのみならず、貿易問題、環境問題などでも、中国批判を展開したという。

それに対して、中国の習近平・国家主席は、新型コロナ問題を「政治問題化して、中国に汚名を着せることに反対する」と強く反発。二大大国が激しく対立する総会となっている。

そもそも国際連合は、第二次世界大戦の惨禍を目の当たりにした国際社会が、もう二度とこのような悲惨な戦争を起こさないように、議論を通して協調する場を設けようと設立されたはずである。ところが、今は、意見を集約する「国連」ではなく、意見をうまく「くくれん」組織となってきつつあるようである。



9月24日(木)

アメリカ・カリフォルニア州のニューサム知事が、15年後までに州内で販売されるすべての新車を、排ガスを一切出さない「ゼロエミッション車」にするよう義務付ける方針を発表。カリフォルニア州といえば、かつて1960年代に、世界に先駆けて、厳しい排ガス規制を打ち出し、公害問題に対する先進地として知られるようになったことを思い出す。

つまり、今回の知事発表は、かつての「杵柄」を改めて手にして、世界に新たな潮流を生み出そうとするものだとも言えるだろう。もっとも今回は、すでにヨーロッパ諸国での対応も進んでいることから、自動車を大きく変化させるものとなるに違いない。自動車はなくなるわけではないとしても、急速に進むテレワークなどを見ていると、人や物の移動そのものを最小限に抑えるという社会が生まれてくるのかもしれないと思う。

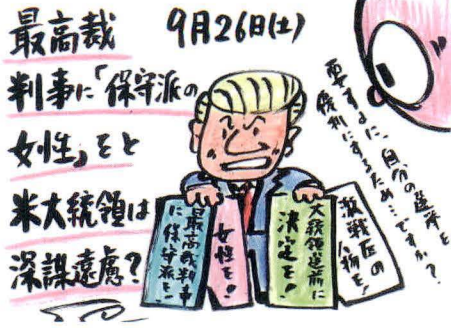


9月25日(金)

菅総理は、この日開かれた「新型コロナ感染症対策本部」で、これまで原則禁止としてきた外国人の入国について、長期滞在者の新規入国を、10月1日から順次認める方針を発表。これまでの禁止措置を続ければ、経済面の打撃が大きくなるため、「観光客以外については、日本人外国人を問わず、検査をしっかりと行った上で、出来る限り往來を再開していく方針で臨む」と語った。

これは、1か0かではなく、感染拡大状況や世論の動向を見つつ、バランスを取りながら臨まねばならない微妙な問題であろう。また、国民や経済界が納得できる説明を、適宜適切に行わねばならない問題でもあろう。

その意味では、菅総理の能力と姿勢が、厳しく問われる問題となることは間違いがない。新総理の下での日本丸、果たして、この難局をうまく乗り切れるか否か…、である。



9月26日(土)

トランプ大統領は、今月死去したギンズバーグ・最高裁判事の後任に、保守派の女性判事として知られるエイミー・バレット・シカゴ連邦高裁判事を指名。ホワイトハウスで、その発表とともに、記者会見も開催した。

この問題は、トランプ大統領の「選挙利用」との批判があり、大きな議論を呼んでいる。

トランプ大統領の言動からすると、この起用は、①保守派であること、②女性であること、③大統領選の激戦区である中西部のラストベルトで活動していたこと、などが理由であったようだ。そして、トランプ大統領は、国民から選ばれた大統領の職責として、この指名の議会承認を、選挙前に断行する、としている。

トランプ大統領の発言には、自分自身の選挙への深謀遠慮が見え隠れするため、なかなか事が進みそうにない。選挙対策上は、大きな話題になる方がよい、ということかも…。



9月27日(日)

大相撲の千秋楽。両横綱が欠場して混戦が予想されていたこの秋場所で、結局、正代が初優勝を決めた。成績は13勝2敗。今回の優勝で、大関昇進もほぼ確実ということである。

正代といえば、その代名詞は、「ネガティブ力士」。今から5年前に新十両に昇進したときの記者会見で、対戦したい力士を聞かれて、「全然ない。できればみんな当たりたくない」と答えたことからつけられたものなのだそう。もっとも本人によれば、ちょうどその時がおの気分だったから、そんな発言になっただけということのようではある。

この日の勉強会のテーマは、「中野雅至著『これからの20年、3極化する衰亡日本人』を考える」であった。激しい変化の中で、いかに日本人が生きていくべきかを問いかけた本である。ネガティブではなく、前向きに困難に立ち向かう日本人であってほしいと願う。



9月28日(月)

昔からよく、貧しさの中から志を持って立ち上がり、偉業を成し遂げた人を称える国を、「偉大な国」と呼ぶことがあった。しかし、今のアメリカでは少し話が違ってきているようだ。

今回、トランプ大統領の納税記録の一部が明らかとなり、大統領就任前の15年間のうち、10年間は連邦所得税を支払っておらず、大統領選で当選した年と翌年がそれぞれ750ドルであった、とNYタイムズが報じた。それに対して、大統領は、「フェイクニュースだ」と反論したものの、その納税記録公開を明言せず、事実上、その報道を認めた形となっている。

つまり、トランプ大統領が「アメリカを再び偉大な国にしよう」と訴えるスローガンとは、「大金持ちが納税しないですむ国こそが偉大な国だ」という意味だと受け取られかねない事態である。しかし、このような説明が、今後の選挙戦で通用するものなのであるつか。



9月29日(火)

アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の集計によると、今日、全世界の新型コロナウイルスによる死者数が、100万人を超えたという。累計感染者数は3,327万人ということであるから、全世界での感染率は約0.5%。そして感染者の中での死亡率は約3%ということになるうかとと思う。たなみに、インドでは一日あたりの死者数が1,000人を上回り、世界最多となっていて、沈静化しつつあるとされるアメリカでも、750人に及んでいるという。

そんな世界の中で、一人気を吐いているのが、中国である。9月8日には、国内で23日間、新たな感染者が一人も出ていないとして、医療関係者などを招いての「勝利式典」を開催したという。そして世界に向けて、「こんな中国に見習え」と強くアピールしている。

それに対し、国際社会は反発。中国の「唯我独尊」的体質が露わとなったようである。



9月30日(水)

11月3日投票のアメリカ大統領選挙を前に、共和党のトランプ大統領と、民主党のバイデン前副大統領が、初のテレビ討論会。

私も、この様子をテレビで視聴していたのであるが、途中で嫌になって、電源を切った。世界の今後に大きな影響を及ぼすアメリカ大統領選挙であるから、今後の展望をどう論じ合うのだろうかと思っていたところが、両候補の間では、非難の応酬だけ。しかも、相手の発言中に割り込んだり、感情的な発言で終始したりと、とても聞けたものではなかった。

この2人の候補は、ともに高齢である。人生経験も豊富であろうし、様々な困難を幾度も乗り越えてきて、知恵も豊かであるはずなのに、深みのある議論はほとんど何もなく、ただのサル芝居であった。「老いの一徹」という言葉もあるが、自己主張と頑固さばかりが目についてならなかったのであった。



10月1日(木)

今日、東京証券取引所のコンピューターがダウンして、全銘柄の売買を終日停止。市場に相場情報を伝えるシステム機器の障害がその理由であったという。

東証といえば、世界を代表する証券取引所の1つ。それだけに、取引システムには、何重にもバックアップの体制がとられていたはずなのに、なぜこのようなトラブルが発生してしまったのか、その原因は、今の段階ではまだ不明である。しかしその打撃は、かなり大きなものであったのだろうと思う。

東証では、2005年にも、システム障害を引き起こし、取引ができなくなることがあった。つまり、今回で2度目。東証の汚点が2つとなった。この2つの点を濁点として、「と」を「ど」にすると、「東証」は「どうしよう」となる。…つい顔がこわばってしまうようなジョークとなってしまったかもしれない。



10月2日(金)

松山市に隣接する砥部町唯一の中学校「砥部中学校」で、1年生を相手にしての講演を行った。そのテーマは、「自分の花を咲かせよう～坂村真民先生の祈りと詩」であった。

実は、仏教詩人として広く知られる坂村真民先生は、その後半生をこの砥部町で過ごされた。そして、教職を去った後は、もっぱらここで、「祈りと詩」にその人生を捧げられた。その人生と業績を称えて、砥部町の名誉町民にもなっておられ、8年前には、町立で「坂村真民記念館」も建設されている。町民が親しみを覚えると同時に、誇りにもしているのが、真民先生というわけである。

そこで、中学校に入ったばかりの若き人たちが、より深く広く「真民先生の祈りと詩」を理解してもらいたいと願って、講演した。1年生約200名、真剣に話を聞いていただいた。子どもたちの良き人生を祈ったのだった。



10月3日(土)

アメリカ大統領選挙に、今回も「オクトーバー・サプライズ」！ 共和党候補のトランプ大統領が、新型コロナウイルスに感染し、この日、ワシントン近郊にある「ウォルター・リード米軍医療センター」に急遽入院したのである。大統領本人は、大統領専用ヘリコプターに、自分の足で歩いて搭乗していたから、この入院時点での病状は、さほど深刻でない印象であったが、この病状は急変するともいう。十分な医療体制のもとでの早期全快をお祈りしたい。

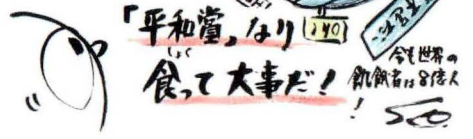
この突発事象に対して、世界中のメディアは、さっそく今後の大統領選挙への影響とその行方に強い関心を示している。これまで劣勢に立ってきたトランプ大統領が、この病気によってさらに劣勢になるのか、それとも、この病を見事に克服して、挽回するのか…。何にしても、世間から注目される人は、病気一つにするのも、大変なことなんだと思った。

今日は 10月8日(木)
副大統領 候補の討論



10月8日(木)
今日、アメリカ大統領選挙の副大統領候補同士でテレビ討論会が行われた。共和党は、現副大統領のマイク・ペンス氏、民主党は、上院議員のカマラ・ハリス氏である。両党の大統領候補がともに高齢であることから、もしもこの時には、大統領の職務を代行する副大統領に、大きな注目が集まったようである。
少し前に行われた大統領候補間での討論会が、討論会の体をなしていなかったと強い批判を浴びたこともあってか、今回の議論は、比較的冷静に進行したようである。
しかし、それでも残念だったのは、今回やはり、アメリカ政治の今後について、そのビジョンが示されなかったことである。もっとも、大統領候補がビジョンを語らない選挙戦を展開しているのだから、その補佐役が、それを飛び越えてビジョンを提示するというのは、とても無理な話ではあるのだが…。

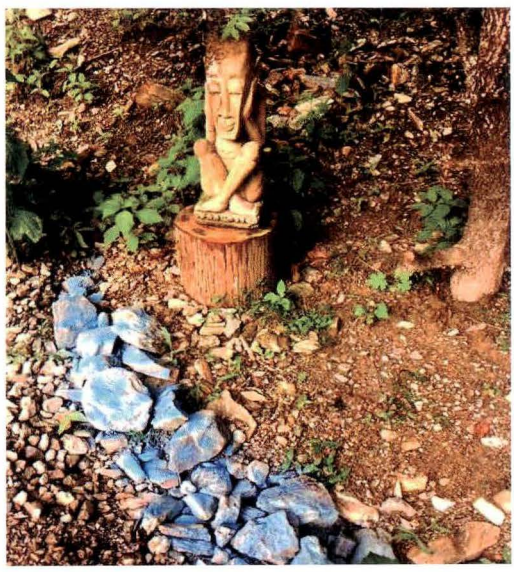
国連の 10月9日(金)
「世界食料 計画」が



10月9日(金)
今日は、「ノーベル平和賞」の受賞者が発表された。今年の受賞者は、「国連世界食糧計画(WFP)」であった。このWFPは、今から約60年前に、国連に設置された組織で、紛争地に食糧を供給したり、途上国の子供たちに栄養価の高い給食を提供したりするなどの活動を行っていて、今も、世界88カ国の9,700万人にその支援を行っているという。
日の当たらない場所での地道な活動を続けてきた組織であり、これまであまり注目されることもなかったが、命を守るという極めて重要な活動が評価されたのだろう。
今の世界で、飢餓人口は、約8億2,100万人にも及ぶのだそうである。地球人口9人に1人が、飢えに苦しんでいるということになる。
このような組織の重要性が、今回のノーベル賞受賞によって、改めて認識されることを強く期待したいものである。

10月10日(土)
1964.10.10 東京オリンピック開会式
東京五輪 あの時私9歳
祭典か
半世紀余り...
当時の日本にや スーパー、テレビ...
人が生きてた...

10月10日(土)
今日10月10日は、今から56年前に、アジアで初めてのオリンピック「東京オリンピック」が開会した日である。それにちなんで、長い間「体育の日」という「国民の休日」でもあった。
あの当時、私はまだ9歳の小学生であった。オリンピックと聞いても、あまり実感が湧かず、正直なところ、周りの人たちが大騒ぎをしている理由がよくわからなかった。ただ、色々な人がにぎやかにオリンピックの話題を語り合っていた姿は、しっかりと記憶に刻まれている。そしてその当時の社会の明るさも、やはり印象深く脳裏に焼き付いている。今の日本と比べると、なんだか別国のことだったかといった印象でもある。
そうなのだと思う。あの時代には、人々は、喜怒哀楽の感情を顕わにしながら、今よりも人間らしく生きていた…。そんなことが妙に懐かしく思われた、今日の一日であった。



若葉書院に設置している「考える人」の像。孔子が、川の畔に立って、「逝くものはかくの如きか、昼夜をおかず」と語ったとされる『論語』の記述内容を、このような形で表現してみたものである。

「享年90歳で旅立った母の思い出」



母が83歳の時の写真

令和2年9月17日(木)午後8時59分、母・小野守子は、数え年90歳で、この世を去りました。死亡診断書には、死亡原因として「急性腎炎」と記入されていましたが、この半年余りで急速に老いを加えていましたから、私は、老衰により、天寿をまっとうして旅立ったと考えています。そして、その長い人生の間に数多くの方々から賜りましたご厚情に対しまして、心より厚く御礼申し上げます。

今回は、その母の思い出を、少し書き綴らせていただきたいと思います。

母が生まれたのは、ちょうど満州事変が起きた昭和6年の3月6日でした。こう語ればご理解いただけるように、母の子供時代は、戦争の時代でした。ですから、英語や音楽はあまり教えてもらえず、また授業よりも工場での学徒動員の仕事が優先された時代だったとよく語っていました。しかも、昭和11年、母が5歳のときには、その父親が肺結核で逝去し

ています。後に残されたのが、香川県から嫁いできていた母と、3人の姉妹。その頃の苦労は、並大抵のものではなかったようです。

晩年の母は、その自らの母・勝美のことをよく語っていました。遠いところを知らないところに嫁いできて、若くして夫を亡くし、苦労の連続だったその人生を思い返すと、涙を止めることが出来ないと。その母・勝美は、昭和45年、62歳で急死しました。苦労ばかりして、人生を楽しむ暇もなく、世を去っていった母親に、おそらく、自らの人生も重ね合わせていたのではないかと思います。

実は、母も、昭和48年、夫の孝一を病で亡くしています。公務での東京出張中に病気で倒れて、そのまま意識を失ったまま、約1年間、看病をし続けます。千葉県の親戚の家に間借りをして、毎日病院に通ったそうです。夫を亡くした時、母はまだ42歳。このときの辛さをよく語っていました。

このように、身近な人を次々と若い年齢で見送らざるを得なかった母は、晩年には、「私はどんなことがあっても90歳までは生きる」と、自らの長寿に強くこだわっていました。そしてそれだけでなく、周りの人たちに対しても、「一緒に90歳までは生きるんよ」と語って、病気の人たちを励ましてもいました。母にとっては、「短命の家系」と思われていた小野家にあって、その壁を打ち破ることが、子孫に対する自分の努めであるとも思っていたのかもしれませんが。

しかし、その後も、実の妹である美知子や同級生などを見送り、さらには長男であり、小野家を担っていた晴昭を、約4年前に失った後は、急に老いを深めていきました。約2年前には、ついに歩けなくなって入院。そしてそこから「住宅型有料老人ホーム」に入所して、残りの人生をこの場所で過ごしました。

今も私の胸で残念なのは、この半年余の間は、「新型コロナウイルス」の感染問題で、母に会いに行くことも叶わなかったことです。ようやく会うことができたのが、老人ホームの担当医からの連絡で、体調が悪化している

から、そろそろ病院に移ることを考えるべきではないかという話があった時。私から、母に一度会って、本人の様子を見てから判断したいをお願いをして、その老人ホーム外のデイケア施設で、短時間会うことができました。そしてその後、病院に転院することとなり、その病院の診察フロアで、少しの時間を共に過ごすことができました。しかしもうそのときには、呼びかけたら少し目を開ける程度の反応しか返すことができず、何かを語り合うなどということは、とてもできる状況ではありませんでした。

人生の最後の時間を、もう少し共有することができていれば、というのが一番悔いが残っている点です。しかしこれは、私たち家族だけではなく、全国、全世界の多くの人たちが共有している思いでしょう。「人生は不条理なことの連続である」とは、アルベール・カミュの言葉です。私たちも、今後、その不条理を、胸に一生涯抱きながら生きていかねばならないのだらうと思います。



母の葬儀風景。「親族葬」の形で執行了しました。

そして、母の遺体は、亡くなった日の夜とその翌日、自分が約88年間を過ごした家に戻り、そこで家族と共に過ごした後、斎場に移されて、19日(土)に通夜、そして20日(日)に葬儀という運びとなりました。

ここでも辛かったのが、「新型コロナウイルス」の問題でした。母は生前、とても人間関係を大事にしていました。年賀状なども、少し前までは、おそらくは1,000通近くを自らが宛名書きをして送っていたのではないかと思います。また、知り合いの葬儀なども、自分が動

ける間は、自らが出掛けて、ご霊前にお参りし、遺族の皆さんを励ましていました。

ですから、年老いてからも、広い人間関係を保ち続けてきていたと思うのです。家族としては、そんな人たちに盛大に見送ってもらいたいという気持ちはありました。それが母の人生を最期に輝かせるものになるだろうと思ったからです。

しかし、今回は、新型コロナウイルス感染への懸念から、家族に身近な親戚だけが加わる「親族葬」の形で葬儀を執り行わせていただきました。親族以外には、事前には一切の告知をせずに、少人数で静かに見送らせていただきました。これも、今回、心苦しかったことの一つですが、致し方のないことであつたように思います。その分、私は、心の中に、いつまでも母の面影を残すような生き方をしたいと思っています。

母は、とても強い人であつたと思います。苦しい時も、辛い時も、ほとんど愚痴を言うこともなく、自分から体を動かして問題解決に毅然と立ち向かっていました。そしてその一方で、とても思いやりのある人でした。こんな人にまで、と思うような人のことまで、いつも気にかけていました。

そんな母であつただけに、自分の思いに反して、身近な人が次々と亡くなっていくことは、とても辛いことであつたのだらうと思います。さらに、自分自身の体が思うように動かなくなり、さらに記憶力がひどく衰えてくる中で、判断がきちんとできなくなっていくことを自覚するようになったことを辛く思い、「もうこんなになってまで生きていたくない」と語ることもありました。これは、若い頃には絶対に見せなかつた一面であつたと思います。

そして、自分が心に決めていた90歳という年齢で、たった一人でこの世を去っていきました。子どもの目からすると、最後くらいは自分の意のままに死んでいきたい、という意味表示であつたかも知れないとも思います。

思い返せば色々な思い出が次々に湧き起ってきます。家族のことを常に思い、家を守ってきた母に深く感謝し、そんな母を支えてくださった多くの皆さんに、心からの感謝を捧げたいと思います。(9月23日 執筆)

● 「鍵山秀三郎先生の言葉から考える田舎再生戦略」イラ短 ●

■ 掃除道 鍵山思想は そのままに 田舎の思想と 呼ぶべきものなり

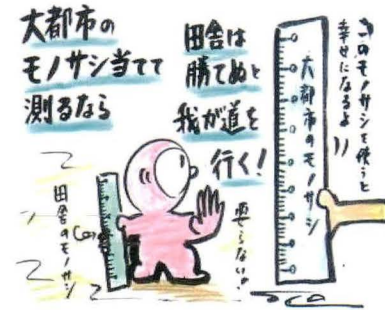
【自分の性格がこうだからしょうがない、と思うのはわがままです《12. 性格》】 鍵山秀三郎先生の著書『人生をひらく100の金言(致知出版社)』には、力のこもった短い100の言葉が収録されている。それらの言葉を読んでいるうちに、これらの言葉に宿された精神と知恵は、過疎が進み、希望を失った田舎の人達の心に強く響くものではないかと思うようになった。

今回は、その中から幾つかの知恵を紹介してみたい。



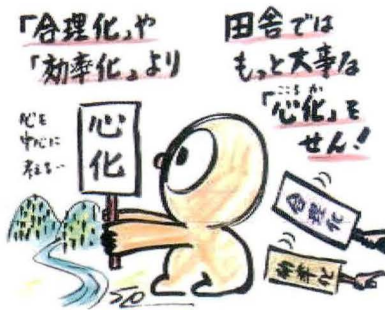
■ 大都市の モノサシ当てて 測るなら 田舎は勝てぬと 我が道を行く!

【問題によって、人生がダメになるということはありません。すべて対処の仕方です。《48. 対処》】 田舎の人は、過疎が進み、地域から活力が奪われていくのを見ながら、環境が良くないのだから仕方がない、と語りがちである。しかし、知恵を絞り、汗を流し、その地域独自の道を切り拓くという努力を重ねているであろうか。都会の物差しを当てて、田舎はとても勝てぬとぼやいても仕方がないことなのではないだろうか。



■ 「合理化」や「効率化」より 田舎では もっと大事な 「心化」をせん!

【心を使うことが大事なのです。そのためにお金も使うし、労力も使うし、時間も使う。そういう使い方ができるようになったときに、初めて人間の器というものが少し大きくなるのだと私は信じています。《40. 器》】 私は、今後、田舎は、心の価値を再発見する場所となるべきだと思っている。人間にとって、お金は大事だが、それに増して心が大切である。その「心化」を足場に、田舎づくりを進めてみてはどうだろうか。



■ 人々に 頼りにされて 喜ばれ そこに生まれる 田舎の魅力

【人間の喜びで最たるものは、人に頼りにされ、人にあてにされることです。これが喜びの中で何よりも大きい。《93. 喜び》】 田舎での地域おこし運動においては、まずお金の計算から始めるよりも、その土地やそこに住んでいる人々が持っている特質が、いかに他の人たちを喜ばせるものとなり得るのか、また、人から頼られるものとなりうるのか、といった視点から考えてみるほうが、分かりやすいのではないだろうか。



今、田舎、特に山村地域は、著しい過疎と高齢化の中で、立ち竦んでしまっている印象である。今回は、そんな地域がどのような考え方で困難に立ち向かうべきかと、鎌山秀三郎先生の語録を足場に、思いつくままにイラ短を描いてみた。

■ 小さくて 風変わりなるもの 面白く 思う心ぞ 田舎の魂！

【小さな喜びを感じ取れない人は、小さな苦しみを大きく受け止めてしまいます。《94. 喜び》】 田舎は、都市と物量や規模で競いあっても、勝ち目は無い。堺屋太一氏が語っていた「規格大量生産型」の経済では、とてもかなわない。

しかし、小さなもの、少し風変わりなものの中に潜む価値を見出して、それを輝かせることができれば、田舎に、独自の魅力を生み出していくことができるのではなからうかと思う。



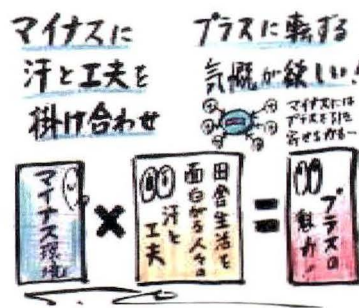
■ 人間の 知恵や心は 無限大! ならばこれこそ 田舎の宝!

【人が見捨てたものの中に、宝の山がある。《87. 宝》】 また、こんなことも考えてみてはどうだろうか。都市に住む人も、田舎に住む人も、同じ人間なのだから、その人間自身には、大きな違いはないのだと。つまり、一人ひとりの人間が持っている「知恵や心」というものは、さほど変わりはない。ならば、それを思いっきり活用して、地域の発展を導き出す取り組みを進めていけばよいのではなからうか。



■ マイナスに 汗と工夫を 掛け合わせ プラスに転ずる 気概が欲しい!

【人生でも授業でも気をつけていることは、自分にとってマイナスの事を出来る限り引き受けるということです。《72. マイナスと接する》】 田舎は、都市と比べれば、確かにマイナスに見えるものも多くあるだろう。しかしそのマイナスは、それに汗と工夫を掛け合わせれば、得もいわれぬ魅力を生み出すことがある。また、マイナスをきちんと受け止めれば、それは多くのプラスを引き付ける力ともなるのではないか。



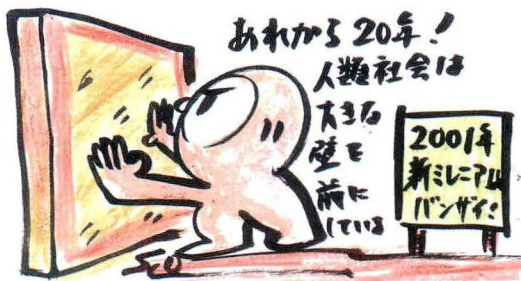
■ 大切な ことには時間が かかるもの 一滴の水を 馬鹿にするまい!

【平凡なことを徹底して続けておきますと、平凡の中から生まれてくる非凡というものが必ず出てまいります。《21. 平凡の力》】 田舎では、いざ勝負というときの瞬発力が、どうしても都市に比べて劣ってしまう。しかしそうならば、気を長くして、時間をかけて取り組めばよい。一滴の水も、長い時間をかけるうちに、とんでもない量になってくるものである。

じっくり腰を据えて取り組む姿勢、これが大切であると思う。



「新ミレニアム」を迎えて20年、 「OAK・TREE運動」の使命を再考する。



人類社会が新しいミレニアム(三千年紀)を迎えたのが、西暦2001年1月1日のこと。このときには、世界各地で、これから新しい時代が始まるという強い期待感を込めて、様々なイベントが行われたことが、記憶に新しい。

私たちが取り組んでいる「OAK・TREE運動」においても、この時期には、何かしら新しい取り組みを始めねばならないという気持ちに急き立てられて、いろいろなことを提案し、またそれを現実をものにしていったという時期であった。

例えば、新しい文明研究を始めようという思いのもとに、「人間の森文明研究所」を開設したのが、西暦2000年の元日。この時は、研究といっても、何をしたらいいのかも、必ずしも定かではなかったが、とりあえずは看板だけでも掛けてみれば、そこから事は始まるに違いないと考えて、少し安直な判断であったかもしれないが、若葉書院(当時は、「ヤング・リーフ・ハウス」と呼んでいた)に、この研究所の看板を掲げたのであった。

そして、新ミレニアム初年となる2001年になってからは、2月に、岡山市で「OAK・TREE全国大会」を開催し、この運動の全国展開を目指してみたり、また11月には、「志の道」を開設したりもした。

その前後には、全国各地で「青年研修会」を始めたり、日中韓3カ国の文明研究者を集めての「新世紀文明国際会議」なども、私が音頭をとってスタートしたりした。

振り返ってみると、この頃は、私自身が、この新しいミレニアムを意識して、希望に胸を

膨らませていた時期であったと思うし、この「OAK・TREE運動」が、最も激しくその新しい可能性を追い求めて動いていた時代でもあった、と言えるかもしれない。

残念ながら、その新ミレニアム到来の熱気は、長くは続かなかつたように思う。この時期に始まった「OAK・TREE運動」の新規の取り組みも、必ずしもその後、大きく広がるといことにはならなかった。そしていつしか、人々の心の中から、この「ミレニアム意識」もだんだんと薄らいできて、これまでの惰性に流される形で、年月が流れて行った印象である。

来年元日には、私たちが新ミレニアムを迎えて、20周年ということになる。皮肉なことではあるが、その前年となる今年には、全世界で「新型コロナウイルス」の問題が社会を揺さぶり、人々は、自らのライフスタイルを変更すると同時に、社会のあり方も、ここから大きく転換していかねばならないのではないかという意識が生まれ始めているのである。

20年間といえば、生まれたばかりの子供が20歳の成人になるまでの期間であり、学びの期間でもある。新ミレニアムになってこの世に生まれしてきた人たちが、いよいよ活躍すべき時代となってくる。その時を狙ったかのように、私たちの社会に襲いかかってきたのが、今回のウィルスであったのである。

おそらくは、これから大きく世の中が変わっていくであろう。その時に大切なことは、一つには、その変化が私たちを何処へ運んでいこうとしているのかということを見極めることであり、もう一つは、いかに激しい変化の波に洗われたとしても、決して変えてはならないものが何であるかということ、きちんと掴むということであろう。

OAK・TREE運動は、これから、そんな基本姿勢をしっかりと持ちながら、取り組みを進めていかねばならないと考えている。これが、新ミレニアムの成人式を迎える日を前にした、私の率直な思いである。 ■

人はつくづく「何を食べるか」ではなく「だれと食べるか」ですね。また、「どこに行くか」ではなく「だれと行くか」ですね。このように私たちは、人とのご縁によって生かされています。

人間の幸福で最たるものは、よい人とのご縁です。

鍵山秀三郎先生の言葉

今回は、現代社会が見落としてしまっていることを、自分自身の身近なところの経験から思い出させてくれる言葉を取り上げた。

私たちは、通常、モノの視点から価値判断を行うことが多い。食事をする時ならば、いかにその食事が高級で美味しいものであるかというものさしで、その料理の良否を判断しがちである。またはどこかへ旅しようというときには、その訪問する先にある名所ともいわれる場所が、いかに珍しく観光価値を持つかということで、その旅を評価しようとしがちである。

しかし、鍵山先生は、本当にそうなのか、と私たちに問いかけているのである。いかに高級な料理が目の前に出されたとしても、そこで共に食事をする人が、胸の中に強いわだかまりを持つ人であり、胃が痛くなるような説教だけをするような人であったとすれば、そんな料理は食べた気もしないのではないですか、と問いかけるのである。同様に、世界遺産を次々に巡るような旅であったとしても、その旅の同伴者が、心から嫌いで、一緒にいて窮屈でたまらないような人であったとすれば、その旅はやはり楽しくないのではないですかと、問いかけるのである。

つまり、料理そのものがいかに粗末ものであったとしても、心を許している人と楽しく食卓を囲むような食事の方が、よっぽどおいしいだろうし、訪れる場所がいかに陳腐なところであったとしても、一緒にいて楽しく時間を過ごすことが

できる人たちとともに旅する方が、よっぽど有意義なのではないですか、というのである。

確かにこれまで私たちが経験してきたことを振り返ってみると、心から楽しく幸福を感じたことというのは、「何をしたか」ではなくて、「誰とともにしたか」ということに、より大きな価値を感じてきたことがよくわかる。

つまり私たちは、物事を判断するときに、より客観的だと考えられるものさしを使って判断しがちであるが、実は、そんなことよりも、自分自身が主体的な意味合いで胸に持っているものさしの方が、ずっと大切なものだということに気がつくのである。

私は、この点に、現代社会が持っている基本問題を感じるのである。つまり、私たちは、目に見える客観的に評価できるものばかりを追いかけて、人々は生き、社会が形づくられてくるものだと考えてきたが、実は、そのプロセスで切り捨ててきたものの中にこそ、もっと大事なものが潜んでいたということを意味しているのではないだろうか。

このしばらく、環境が厳しくなってくる中で、精神的に追い詰められる方々が増えているという。自殺者も増えてきているのではないかと。こんな問題を考える上でも、これからよくよく考えなくてはならない視点が、この話の中に潜んでいるのではないかという気がしてならないのである。

(10月3日 執筆)



11月・OAK・TREE勉強会のご案内

フォレスト・トレンド勉強会 テーマ 「日本の未来について考える」	11月8日(日) 13:30～15:30	若葉書院
人間論ゼミ テーマ 「良寛の人生と思想と書」	11月15日(日) 13:30～15:30	若葉書院
幸福思想研究会 テーマ 「中野孝次著『老年の愉しみ』を読む」	11月22日(日) 13:30～15:30	若葉書院
人間哲理研究会 テーマ 「湯浅泰雄著『気とは何か』を論じる」	11月29日(日) 13:30～15:30	若葉書院

■参加ご希望の方は、準備や緊急時の対応などもありますので、必ず、ご連絡下さい。

連絡先のご案内

電話を頂いて不在の時もありますが、その時は、留守番電話で受けさせて頂くこと致します。



樞樹舎

〒792-0856 愛媛県新居浜市船木字大久保甲1257-8 電話(0897)43-1104 FAX(0897)43-1139
E-mail oak-tree1984.4@nifty.com 来訪時は、「大久保自治会館」を目印にお越し下さい。また、必ず事前にお電話下さい。



OAK・TREE購読料納入のお願い (2020年4月号～2021年3月号)

「郷土と日本の未来の姿を、読者の皆さんと一緒に考えていこう」という理念の下に、昭和59年に創刊号が発刊されて以来、月刊OAK・TREE誌、そして、フォレスト活動や人間論ゼミなどの諸活動を、皆様方の深いご理解とご協力によって支え続けて頂きました。心より厚く御礼を申し上げます。

今後も引き続き、皆様方のご賛同を頂きながら、より精力的な活動を展開して参りたいと思います。このOAK・TREE運動の趣旨にご賛同頂ける方は、是非、「月刊OAK・TREE」のご購読を賜り、この運動をお育て頂けますよう、お願い申し上げます。

- ◆ 年間購読料 5,000円
- ◆ 購読料振込先
[ゆうちょ銀行](169店)
01670-5-76693
小野晋也

12月・OAK・TREE勉強会のご案内(仮)

- フォレスト・トレンド勉強会 12月6日(日) 「量子力学が示す社会的可能性を考える」
- 人間論ゼミ 12月13日(日) 「本多静六の人生と思想」
- 幸福思想研究会 12月20日(日) 「世阿弥著『風姿花伝』に見る幸福感」
- 人間哲理研究会 12月27日(日) 「若葉書院・年忘れ勉強会」

■■■ 12月27日(日)「若葉書院・年忘れ勉強会」のご案内 ■■■

令和2年も、残すところ僅かとなってきました。今年の最終勉強会は、12月27日(日)に、「若葉書院・年忘れ勉強会」として、開催したいと思っております。このときには、この一年間の活動を振り返るとともに、若葉書院の清掃を参加者全員で行いたいと考えています。

- 12月27日(日)・午後1～3時(勉強会)、午後3時～4時(清掃)

月刊OAK・TREE(オークツリー)【毎月1回・1日発行】

発行所 樞樹舎

〒792-0856 愛媛県新居浜市船木字大久保甲1257番地8 TEL(0897)43-1104 FAX(0897)43-1139

電子メールアドレス oak-tree1984.4@nifty.com

インターネットURL <http://iratan.cocolog-nifty.com/blog/> (イラ短日記)

インターネットURL <http://oaktree.my.coocan.jp/> (勉強会日程等御案内)

発行人 小野晋也

定価 400円 (年間購読料は、配達料込みで5,000円) 郵便振替番号 01670-5-76693 小野晋也

【もし落丁・乱丁があった場合は発行所までご連絡下さい。お取り替えさせていただきます】